



TITLE:

李義山七律集釋稿(七)

AUTHOR(S):

李義山七律注釋班

CITATION:

李義山七律注釋班. 李義山七律集釋稿(七). 東方學報 1989, 61: 569-607

ISSUE DATE:

1989-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66686>

RIGHT:

李義山七律集釋稿(七)

李義山七律注釋班

*掲載詩篇目

隨師東	393	五七一頁
杜工部蜀中離席	98	五七九頁
安定城樓	295	五八七頁
水齋	525	五九三頁
復至裴明府所居	386	五九八頁
子初郊墅	388	六〇三頁

集」および「補編」と略稱する。

*舊注をふまえるばあいも原則として注者の名をあげない。諸本の詩釋については、釋者の名をあげ、原則として全文を載せる。

*詩釋のうち、朱鶴齡の項の「補注」は文獻⁽¹²⁾順治刊本各卷末附載。何焯および紀昀の項の評本は⁽¹³⁾沈氏輯評本をさす。

*主要文獻一覽

一 無注本

(1) 李商隱詩集三卷 唐詩百名家全集本(席本)

(2) 李商隱詩集三卷 景印錢謙益寫校本(錢本)

(3) 李義山集三卷 唐人八家詩本(毛本)

(4) 全唐詩(三卷)

(5) 李義山詩集三卷 四庫全書本(庫本)

(6) 唐李義山詩集六卷 四部叢刊本

(7) 唐音統籤(十卷)

(8) 唐詩(十一卷) 藝文印書館景印本(稿本)

(9) 李商隱詩集十卷補遺一卷 高麗刊本(懷德堂文庫藏)

*七律の全篇を分類により排列する唐音統籤の行役類から三首、居處類から三首を載せる。統籤が明示する咏古・情詞以外の類目名は注釋班の判斷による。

*席本李商隱詩集を底本とし、とりあげまたは引用する義山の詩には底本の排列による作品番號を記す。「李義山詩各本篇目對照表」

(本誌五〇冊) 參照。

*義山の文の引用は樊南文集詳註および樊南文集補編により、「文

二 舊注

(10) 唐詩類苑二百卷

王俊臣校注 王清臣・陸貽典參解

(11) 玉溪生詩箋三卷 錢龍惕撰 (靜嘉堂文庫藏)

(28) 唐才子詩甲集七言律八卷 金聖歎撰

(12) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 (順治十七年序刊本) (內閣文庫藏)

(29) 才調集十卷 韋穀輯 馮舒・馮班評 (二馮評閱本)

(13) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 沈厚燠輯評

(30) 才調集補註十卷 殷元勳箋註 宋邦綏補註

(14) 西崑發微三卷 吳喬撰

(31) 唐詩貫珠六十卷 胡以梅撰

(15) 義門讀書記李義山詩二卷 何焯撰

四 近代注釋

(16) 李義山詩疏二卷 徐德泓・陸鳴皋撰 (徐陸合解) (懷德堂文庫藏)

(32) 李義山詩講義 森槐南

(17) 李義山詩解不分卷 陸崑曾撰

(33) 李義山の無題詩 鈴木虎雄 (中國文學報六冊)

(18) 李義山詩集十六卷 姚培謙箋

(34) 李商隱 高橋和巳 (中國詩人選集一五)

(19) 玉溪生詩意八卷 屈復撰

(35) 李商隱表現考・斷章——豔詩を中心として—— 山之内正 彦 (東洋文化研究所紀要四八冊)

(20) 重訂李義山詩集箋注三卷集外詩箋注一卷 朱鶴齡元本 程夢星刪補

(21) 玉溪生詩說二卷 紀昀撰

(36) The Poetry of Li Shang-yin 劉若愚

(22) 玉溪生詩詳註三卷 馮浩撰

(37) 李商隱詩選 安徽師範大學中文系古代文學教研組

(23) 玉溪生年譜會箋四卷・李義山詩辨正不分卷 張采田撰

(38) 李商隱詩選 陳永正

(24) 李義山詩偶評 黃侃撰

五 その他

(25) 註唐詩鼓吹十卷 郝天挺撰 廣文書局景印元刊本

(39) 李商隱詩索引 早稻田大學中國文學會李商隱詩索引編集班

(26) 唐詩鼓吹註解大全八卷 廖文炳撰 (內閣文庫藏)

(40) 李義山文索引 京都大學人文科學研究所附屬東洋學文獻センター索引叢刊第一

(27) 唐詩鼓吹十卷 元好問輯 郝天挺注 廖文炳解 錢朝鼎・

唐詩選本注釋

三

隨師東 393

隨師東す

東征日調萬黃金 東征日に調す 萬黃金

幾竭中原買鬪心 幾ど中原を竭して鬪心を買う

軍令未聞誅馬謖 軍令未だ聞かず 馬謖を誅するを

4 捷書唯是報孫歆 平呉之役上言得 歆呉平孫尚在 捷書唯是孫歆を報ず 平呉の役に歆を母と上言し呉平きて孫尚在り

但須驚驚巢阿閣 但だ須つ驚驚 阿閣に集くを

豈暇鷗鷗在泮林 豈暇あらん鷗鷗 泮林に在らしむるに

可惜前朝玄菟郡 惜しむ可し前朝の玄菟郡

8 積骸成莽陣雲深 積骸は莽を成し 陣雲深し

校

0 唐詩類苑七〇(武部戰伐類)

隨師東 高麗本「隨師東征」

隨 馮浩本「隋」

全唐詩題下注「太和元年李同捷盜據滄景詔諸道軍討之久未成功

每有小勝則虛張首虜以邀厚賞饋運不給滄州喪亂之後骸骨蔽地城

空野曠戶口什無三四」

4 雙行注 唐音統籤「自注」二字を冠す 朱本・全唐詩・馮浩本

「原注」二字を冠す

得歆 朱本「得歆首」

孫 朱本「歆」

6 暇 朱本・全唐詩・庫本・馮浩本「假」

韻

下平二十一侵(金・心・歆・林・深)(韻目は廣韻による)

李義山七律集釋稿(七)

朱鶴齡

*

《通鑑》太和元年。李同捷盜據滄景。詔烏重胤王智興康志陸史憲

誠李載義李聽張瑤。各率本道兵討之。二年九月。命諸軍進討王庭

湊。十月。憲誠及同捷戰于平原。屢敗之。載義又敗之于長蘆。柳

公濟敗庭湊于新樂。又敗之于博野。劉從諫又敗之于昭慶。時諸軍

討同捷。久未成功。每有小勝。則虛張首虜。以邀厚賞。朝廷竭力

奉之。饋運不給。滄州喪亂之後。骸骨蔽地。城空野曠。戶口什無

三四。詳詩中語。正此時事也。

7・8 按。隋煬帝大業中。頻年用兵高麗。末二語。蓋舉往事以諷

也。

〔補注〕《潘畊曰》按韻會。隋。古本作隨。文帝去辵作隋。二字

通用。此詩蓋引隨師東征之事以諷當時也。軍令未聞誅馬謖。謂宇

文述等九軍敗于薩水。帝不忍誅。無何遂加述開府。則軍令廢矣。

捷書惟是報孫歆。謂帝再舉東征。高麗囚斛斯政請降。帝既還。罪

人竟不得。則捷書虛矣。驚驚四句。極言人君當任賢圖治。不必遠

事招懷。如無向遼東浪死歌。豈非殷鑒哉。觀末二語。其爲隋事甚

明。蓋亦咏史之作也。夫李同捷據滄州。自當進討。非煬帝生事外

夷比。然諸將玩寇邀賞之罪則有不可逭者。此故假隋事以譏切之。

朱彝尊

3 謂宇文述等九軍敗於薩水。帝不忍誅。無何加述開府。則軍令廢

矣。

4 謂帝再舉東征。高麗囚斛斯政請降。帝既還。罪人竟不得。則捷

書虛矣。

7 借征高麗爲比也。

何焯

〔評本〕憂不在東藩之不服。而在中原之力竭。將有隋末羣盜之起。師出無名。不當遂非也。

5・6 當班師。且置此子度外。以隋爲鑒。

徐德泓

窮兵之戒。既托于隋。而篇中只有東征玄菟一點。仍不用隋事以實之。而復引古爲喻。所謂玄之又玄也。其靈奧如此。雖老杜亦當遜是一籌。

陸鳴皋

文宗時。詔諸道兵討李同捷王庭湊等。師老無功。每虛報捷以邀賞。故假隋以諷也。首言竭貲饋運。次譏諸將之掩敗張功。五六句。言朝廷但當進賢保治。而無取窮兵致遠也。結到生靈塗炭。可抵一篇戰場文。

0 隋煬帝大業中。頻年東征高麗。故名題。

陸崑曾

此借隋東征之役。以譏切時事也。通鑑太和元年。以李同捷爲兗海節度使。同捷不受命。詔發諸道兵討之。故曰東征日費萬黃金。幾竭中原買鬪心也。王庭湊陰以兵糧助同捷。黨惡之罪。在所不原。乃微露請服之意。遂赦之而復其官爵。是威令廢矣。故曰軍令未聞誅馬騮也。時諸軍在外。久未成功。每小勝。輒虛張首虜以邀賞。朝廷竭力奉之。江淮爲之耗弊。故曰捷書惟是報孫歆也。下半言人

君當爲鸞鳳。不當爲鷹鷂。彼大業中。用兵高麗。至有浪死遼東之歌。今滄州喪亂後。骸骨蔽地。戶口什不存一。可不惻然動念也哉。

姚培謙

此諷廟算之失也。太和元年。李同捷據滄景。詔諸軍各率本道兵討之。二年。命討王庭湊。諸軍雖屢有小勝。徒虛張首虜。以邀厚賞。朝廷竭力奉之。故有此作。討逆敵愾。自是武臣本分事。乃日費斗金以買鬪。將愈驕。卒愈惰。邀功倖賞無已。勢所必至也。然此皆廟算無人之故。蓋內無鸞鷂。故外有鷂鷂。誠使一將成功。而致枯萬骨。已不忍道。況功未成而枯萬骨乎。可痛極矣。

0 按《韻會》隋。古本作隨。文帝去辵作隋。二字通用。此詩蓋引

隋師東征之事以諷當時也。

屈復

竭中原有數之黃金。欲買戰士之鬪心。號令嚴明。無虛張首虜。方可成功。今俱不然。況棄鸞鷂而假鷂鷂。以前朝久置之地。積骸成莽。征戰不休。誠可惜也。○鸞鷂比君子。鷂鷂比小人。此首蓋不敢明言時事。而借隋煬帝之東征爲題也。

程夢星（朱鶴齡本補注を全文引く）

紀昀

〔詩說下〕何以不取隨師東也。曰。四家以爲終傷蹇直也。五六句。歸愚所賞。然詩中筋節。在此二句。過求筋節而失之板腐。亦在此二句（評本「四家評曰。終傷蹇直。五六句。歸愚所賞。然詩中筋節在此。過求筋節而失之板腐。亦在此。所謂十成死句也。漁洋倡爲神韻之說。其流弊乃有聲無字之誚。故歸愚救以樸實。然樸實亦

有流弊。在善學者斟酌之。

問長孺解末二句如何。曰。不然。此詩一篇皆就隋事以託諷。未露正文。開首東征。卽指高麗之役。非前四句序時事。中二句發議論。末二句以前朝指點也（評本「此全借隋事以託諷。長孺謂末二句始舉隋事。非也」）。

問隨字經文帝去禿爲隋。何以仍書隨字。曰。當時雖去禿旁。意後來仍兩書之。如殷商之兩稱也。觀歐陽詢書醴泉銘石刻。中云隨氏舊宮。營于曩代。亦有禿旁。是可證也（評本「此隨師直指隋朝。歐陽詢書醴泉銘。隨氏舊宮句。字亦從禿」）。

馮浩

朱長孺曰。通鑑。寶曆太和間。橫海節度使李全略死。其子同捷盜據滄景。詔烏重胤王智興康志陸史憲誠李載義李聽張璠。各率本軍討之。重胤薨。諸軍久未成功。每有小勝。則虛張首虜。以邀厚賞。朝廷竭力奉之。江淮爲之耗弊。至三年。斬同捷。滄景悉平。喪亂之後。骸骨蔽地。城空野曠。戶口什無三四。詩正此時作。隋煬帝大業中。頻年用兵高麗。蓋舉往事以諷也。浩曰。朱箋本兼討王廷漢言之。以廷漢助同捷也。然詩專指滄景。故爲刪改。凡舊說之本是而小誤。或未詳明者。余乃修飾而存之也。潘昉引隋煬帝征高麗。宇文述等九軍敗績於薩水。帝怒。除其名。明年。復述等官爵。又徵兵討高麗。以解軍令句似合。其解捷書句。則所引有舛。詩固借隋爲言。何煩切證歟。五句謂須賢臣在朝。然非泛指也。舊書紀及裴度傳。敬宗歎宰執非才。致姦臣悖逆。學士韋處厚力請復用裴度。河北山東。必稟廟算。度自興元入朝。復知政事。及同捷竊弄兵權。

以求繼襲。度請行誅伐。踰年而同捷誅。度前後在朝。衆望所尊。惜屢被讒沮。時則以年高多病。懇辭機務矣。故詩有含意焉。

6 詩。翩彼飛鵠。集于泮林。食我桑黠。懷我好音。喻淮夷之歸化也。此句取義稍異。

張采田

〔辨正〕感事傷時。急不擇言。故據所見以直書。而草野私憂之情。自見言外。此賦體所以更高於比興也。何害於樸實哉。然以爲板腐蹇直。則有大繆不然者。且詩借隋事以託諷。正得詩人諷諫之旨。故篇中不妨明抒己憤也。

〔會箋〕朱長孺謂此詩詠討滄景。是矣。惟引隋煬帝大業中用兵高麗。以爲舉往事以諷。午橋孟亭。皆從其說。則非也。詳通首隸典。無一切隋事者。且義山唐人。陳隋事以刺今。又何異劇秦美新耶。余細參詩題。蓋義山隨令狐楚赴天平時書事之作。同捷自寶曆末盜滄景。至是年五月始平。喪亂之後。骸骨蔽地。城空野曠。戶口什無三四。義山赴鄆在十一月。正瘡痍未復時也。末用玄菟故實者。滄景舊隸平盧大都督府。例兼新羅渤海押蕃諸使耳。此解詩意乃切。隨隋雖古通。然舊本則皆作隨。五句。馮氏謂暗指裴度。極有見。唐自憲宗用晉公討平淮鄆。河北驛驛稟命。宰相崔植杜元穎不知兵。劉總歸朝。所籍軍中難制者。竝勒還幽州。克融廷湊作亂。遂至再失河北。亮海滄景。羣起效尤。豈非廟堂用人之咎哉。詩人推原禍始。固不同於目論也。

胡以梅（咏史類）

此咏隋煬帝征高麗之事。蓋讀史而作也。言東征日調發黃金萬兩。

竭中原之力。以買戰鬪之心。軍令不嚴。失機不坐。欺蒙報捷。假捏非眞。其贖武失律。眞可歎也。要知但須中國有道。則鳳凰巢於阿閣矣。豈暇論于鷗鷺在泮林乎。若無道則自治不暇。又何能及外夷。暇字極明。朱箋作假。誤。結則指出其處。而哀生靈之慘也。

按是題。明言隨師東。隨即隨。：東。東征。稱中原。以見征在邊遠。且結又說出玄菟。是無可移易者。乃集箋以爲指征李同捷據滄景事。則中原二字。與結處。如何強合耶。：按〔舊〕唐書高麗傳。貞觀：五年。詔遣廣州都督府司馬長孫師往收瘞隋時戰亡骸骨。毀高麗所立京觀。則積骸成莽。誠實錄也。

近代注釋

〔森槐南〕上卷一四六頁。〔安徽師大〕四頁。〔陳永正〕八四頁。

* *

0 隨〔馮浩注〕廣韻。隋。本作隨。隋文帝去走。彭叔夏文苑英華辨證。隨隋二字。通鑑初書楊忠爲隨公。楊堅爲隨王。文帝方省文爲隋。按水經。涇水逕隨縣西。漢碑亦有作隨者。金石文字記云。隨隨二字通用。余意或隋文特禁用隨。非始省作隋也。〔又注補〕按國語。晉臣辛俞曰。是隋其前言。註曰。隋。許規切。壞也。是亦音隨。唐人碑文中。每有書隨高祖者。其通用審矣。

隨師（東征の）師に隨うとよむことも可能ではあるが、果して本作品に適合するかどうか。〔許渾和浙西從事劉三復送僧南歸詩〕憐師不得隨師去。已戴儒冠事素王。この許渾の用例では師のなかが全く異なり、むしろ傍證にならない。

隨すなわち隨とすれば、〔唐太宗班師詔〕憬彼島夷。僻居鯁壑。

晉皇淹駕。纔克一城。隋帝頻師。淪兵百萬。〔又收瘞征遼士卒詔〕日者隨師度遼。時非天贊。從軍士卒。骸骨相望。遍於原野。良可哀嘆。掩骼之義。抑惟先典。其令竝收瘞之。義山の詩にも〔贈送劉五經映三十四韻54〕周禮仍存魯。隋師果禪唐。そのほか詩題には〔隋宮99〕〔隋宮127〕〔隋宮守歲236〕、また文には〔補編九梓州道興觀銘〕昔隋室以綠字騰芳。赤符宣慶。などがあるが、隋室の隋を隨と表記した例は、現行の義山詩文のテキストでは他にない。何故この詩のみ「隨」を用いているのか、それが偶然か否かの疑問は残る。

隋の高麗遠征について唐朝側からの總括的な批判は、〔唐太宗親征高麗手詔〕隋室淪亡。其源可觀。良繇智略。乖於遠圖。兵士疲於屢戰。政令失度。上下離心。德澤不加於匹夫。刻薄彌窮於萬姓。當此時也。高麗之主。仁愛其人。故百姓仰之如父母。煬帝殘暴其下。故衆庶視之如仇讎。以思亂之軍。擊安樂之卒。務其功也。不亦難乎。何異入水而惡其濡。踐雪而求無迹。

その太宗も結局鬼門に向かい、前車の轍を踏む。歷代の皇帝の高麗征服慾は心ある人士にとって頭痛の種だったろう。〔李君球諫高宗將伐高麗疏〕昔秦始皇。好戰不已。至於失國。是不愛其內。而務其外故也。漢武遠討朔方。殆乎萬里。廣拓南海。分爲八郡。：至於末年。方垂哀痛之詔。自悔其失。彼高麗者。遐荒小醜。潛藏山海之間。得其人。不足以彰聖化。棄其地。不足以損天威。何至乎疲中國之人。傾府庫之實。使男子不得耕耘。女子不得蠶織。李君球の疏には、その當時最も痛切な事例であるはずの煬帝の失

敗をあげないが、この事例はまだあまりに生々しすぎさしきわりがあるのを恐れ、ふれるのを意識的に避けたのであろう。

1・2・3・4 「舊唐書一四三李同捷傳」時諸軍在野。朝廷特置供軍糧料使。日費寔多。兩河諸帥。每有小捷。虛張俘級。以邀賞賚。實欲困朝廷而緩賊也。繒帛征馬。賜之無算。

1・2 「唐高祖舉義旗誓衆文」異哉。今上之行己也。：遠水屢征。殲丁壯於億兆。伊谷轉輸。斃老幼於百萬。禽荒罄於飛走。蠶食窮於水陸。征稅盡於重斂。民力殫於勞止。十分天下。九爲盜賊。

1 東征 「詩小雅漸漸之石」漸漸之石。下國刺幽王也。戎狄叛之。荆舒不至。乃命將率東征。役久病於外。故作是詩也。○漸漸之石。維其高矣。山川悠遠。維其勞矣。武人東征。不皇朝矣。

「唐太宗平薛延陀幸靈州詔」雖復去歲東征。士馬勞倦。甫旋京邑。曾未踰年。今秋復行。理多疲頓。但以良藥苦口。非病者甘焉。而必飲之。思去膏肓之疾。

「杜收東兵長句十韻」玄象森羅搖北落。詩人章句詠東征。

日調萬黃金 「漢書六四上主父偃傳」諫伐匈奴曰。：故兵法曰。與師十萬。日費千金。秦常積衆數十萬人。：不足以償天下之費。

萬黃金 「李白白紵辭三首之二」月寒天清夜沈沈。美人一笑千金。

2 竭 義山にまた「行次西郊作566」重賜竭中國。強兵臨北邊。

中原 「左傳僖公二十三年」若以君之靈。得晉反國。晉楚治兵。遇於中原。其辟君三舍。若不獲命。其左執鞭弭。右屬囊韃。以與君周旋。『唐高祖收葬道殣詔』自隋室不綱。政刑荒廢。戍役煩重。

師旅薦興。元元無辜。墮於塗炭。轉死溝壑。暴骨中原。宗黨淪亡。邑居散逸。『魏徵述懷詩』中原還逐鹿。投筆事戎軒。義山にまた「行次西郊作566」中原遂多故。除授非至尊。：中原困屠解。奴隸厭肥豚。

閹心 「左傳成公十六年」楚有六閹。不可失也。：鄭陳而不整。蠻軍而不陳。陳不違晦。在陳而囂。合而加囂。各顧其後。莫有鬪心。『韓愈送無本師歸范陽詩』老懶無鬪心。久不事鉛槧。義山にまた「文集一爲濮陽公陳情表」臣自受命以來。爲日斯久。未嘗一日。不修戰略。未嘗一日。不數軍儲。使士有鬪心。無虛額。

3 軍令 「管子小匡」管仲對曰。：公欲速得意於天下諸侯。則事有所隱。而政有所寓。公曰。爲之奈何。管子對曰。作內政而寓軍令焉。『史記五七周勃世家』勃子亞夫爲將軍。軍細柳。：上自勞軍。：先驅至。不得入。先驅曰。天子且至軍門。都尉曰。將軍令曰。軍中聞將軍令。不聞天子之詔。『韓愈東都遇春刻詩』轉輸非不勤。稽道有軍令。

馬駭 「三國蜀志三五諸葛亮傳」〔章武六年春〕魏明帝西鎮長安。命張郃拒亮。亮使馬騭督諸軍在前。與郃戰于街亭。騭違亮節度。

舉動失宜。大爲郃所破。亮拔西縣千餘家。還于漢中。戮騭以謝衆。〔又三九馬騭傳〕亮進無所據。退軍還漢中。騭下獄物故。亮爲之流涕。

4 捷書 「王維從軍辭」髦頭夜落捷書飛。來奏軍門着賜衣。〔杜甫洗兵馬行〕中興諸將收山東。捷書夜報清晝同。

孫歆 「晉書三四杜預傳」遺牙門管定周旨伍巢等。伏兵樂鄉城。

外。歆遣軍出距王濬。大敗而還。旨等發伏兵。隨歆軍而入。歆不覺。直至帳下。虜歆而還。王濬先列上得孫歆頭。預後生送歆。洛中以爲大笑。

平吳之役 [庾信長孫儉神道碑] 昔日伐蜀之謀。張儀與秦昭計合。平吳之利。羊祜與晉武意同。

5・6 [白氏長慶集四七禮部試策五道之三] 問：朝陽之桐。聿來鳳羽。泮林之楫。克變鳴音。

5 但須 只須。只要な、とほぼ同義か。「助字辨略三」にいう、又魏志鍾會傳、但可敕會取文、不足自往。但可、猶云只須。李太白詩、但使主人能醉客、不知何處是他鄉。此但字、與上義頗相近。言只要得主人肯醉客耳、又何恤他鄉邪。

鸞 鸞 [文選五左思吳都賦] 鸞鸞食其實。鵲鵲擾其閒(劉淵林注 鸞鸞。鳳雛也)。「說文四上」鸞。鸞。鳳屬。神鳥也。從鳥。獄聲。春秋國語曰。周之興也。鸞鸞鳴於岐山(段注 周語。內史過說。韋曰。三君云。鸞鸞。鳳之別名也。按三君者。侍中賈逵侍御史虞翻尚書僕射唐固也。許云鳳屬。於賈小異。劉逵曰。鸞鸞。鳳雛也。說又異)。

阿閣 [古詩十九首之五] 西北有高樓。上與浮雲齊。交疏結綺窗。阿閣三重階(李善注 尚書中候曰。昔黃帝軒轅。鳳皇巢阿閣。周書曰。明堂威有四阿。然則閣有四阿。謂之阿閣。鄭玄周禮注曰。四阿。若今四注者也)。義山にまた[昭肅皇帝挽歌辭三首之三364] 始巢阿閣鳳。旋駕鼎湖龍。

6 豈暇 [杜甫詠懷二首之一] 高賢迫形勢。豈暇相扶持。

鷓鴣 [詩豳風鷓鴣] 鷓鴣鳴。既取我子。無毀我室(毛傳

鷓鴣。鷓鴣也)。「隋煬帝三征高麗詔」朕纂成寶業。君臨天下。日月所照。風雨所沾。孰非我臣。獨隔聲教。蕞爾高麗。僻居荒表。鳴張狼噬。悔慢不恭。「唐太宗威鳳賦」鷓鴣嘯乎側葉。燕雀喧乎下枝。慙已陋之至鄙。害他賢之獨奇。「又克高麗白巖城詔」朕乃鼓行乘勝。師次白巖。兇徒相率。登陴拒守。妖氛蜩聚。如憑劍閣之深。同惡鳴張。若負洞庭之險。

泮林 [詩魯頌泮水] 翩彼飛鸞。集于泮林。食我桑椹。懷我好音(毛傳 鸞。惡聲之鳥也)。「鄭箋」言鸞恆惡鳴。今來止於泮水之木上。食其桑椹。爲此之故。故改其鳴。歸就我以善音。喻人感於恩則化也。憬彼淮夷。來獻其琛。元龜象齒。大賂南金(毛傳 憬。遠行貌。琛。寶也。元龜。尺二寸)。

7 可惜 [杜甫可惜詩] 可惜歡娛地。都非少壯時。

前朝 [包佶雙山過信公所居詩] 遙禮前朝塔。微聞後夜鐘。

「杜牧赤壁詩」折戟沈沙鐵未銷。自將磨洗認前朝。

玄菟郡 [漢書六武帝紀] (元封三年)夏。朝鮮斬其王右渠降。

以其地爲樂浪・臨屯・玄菟・眞番郡。「又二八下地理志」玄菟郡。

武帝元封四年開。高句驪。莽曰下句驪。屬幽州。縣三。高句驪。上殷台。西蓋

馬。

「隋煬帝征高麗詔」今宜授律啓行。分麾屈路。左第一軍。可鏐方道。第八軍。可玄菟道。「又三征高麗詔」是以去歲出軍。問罪遼碣。殲長蛇于玄菟。戮封豕于襄平。扶餘象軍。風馳電逝。追奔逐北。徑躡沮水。「唐太宗命將征高麗詔」凡此諸軍。萬里齊

舉。頓天羅於海浦。橫地網於遼陽。朕然後經塗白狼之右。親巡玄菟之城。〔褚遂良諫親征高麗疏〕今一旦棄金湯之全。渡遼海之外。……夫玄菟濱海。途深難測。非萬乘所宜行踐。

8 積骸成莽

〔後漢書酷吏列傳六七〕故臨尼之職。專事威斷。族滅姦軌。先行後聞。……故乃積骸滿莽。漂血十里〔李賢注。莽。阡也〕。〔左傳哀公元年〕楚雖無德。亦不文殺其民。吳日敝於兵。

暴骨如莽〔杜注。草之生於廣野。莽莽然。故曰草莽〕。而未見德焉。〔溫子昇大覺寺碑〕自始及終。從兄至聖。積骨成山。祇劫莫數。

〔隋煬帝收葬遼東戰亡者詔〕委命草澤。棄骸原野。興言念之。

每懷愍惻。往年出軍問罪。將屆遼濱。……遂令死亡者衆。不及埋藏。

〔唐高祖舉義旗誓衆文〕暴骸如莽。僵尸若麻。〔唐太宗祭征遼戰亡將士文〕惟爾等……殞命戰場。殘形寇壘。膏潤原野。身喪名存。

搖落寒關。遂非生入。蒼茫雪野。無復餘蹤。〔又收瘞征遼士卒詔〕前出、五七四頁下段參照。

陳雲深 〔史記二七天官書〕陳雲如立垣。杼雲類杼。〔張巡聞笛詩〕營開邊月近。戰苦陳雲深。

* * *

0 この詩の解釋は詩題の「隨」を固有名詞と取るか否かで全く異なったものとなる。隨師すなわち隨師ならば、誰しも煬帝の高麗遠征を連想し、本篇が(A)詠史詩の體裁を成しているのは一見して明らかだが、(B)そこに義山在世のころの政治情勢をよみ込んだとも考えられる。(C)天平軍節度使令狐楚の「師ニ隨ッテ東ス」(あるい

は「師ノ東スルニ隨ウ」とよんだ張采田(會箋)の説は現代中國の注釋者にも受け繼がれているが、詩題はもちろん正文にも令狐楚のレの字も出ないのは、いかにも不自然ではあるまいか。

A 詠史說

胡以梅

B 託諷說

B₁ 徐・陸鳴皋・姚・屈・紀・馮・張(辨正)
B₂ 朱・程・陸崑曾・森

C 時事說

胡震亨(?)・張(會箋)・安徽師大・陳

徐德弘以下のB₁説は、作中では専ら隋朝の事しかとりあげられていないとし、朱鶴齡等のB₂説は最後の二句に至り初めて隋の史實にふれるとする。胡震亨は本篇を「咏古」類に編せず、恐らくC説か。安徽師大は、著者名儀が劉學鍇・余恕誠となった改訂重版(一九八六・人民文學出版社)において説をB₁に改めた。

1・2 東方のまつろわぬ者どもを平定するのに、隋朝は日々莫大な黄金を人民から調達し、ほとんど中原の地を涸渇させるほどまでにして、出征の將兵の鬭爭心——戰意をあがなつた。

3・4 ところが肝心の出征軍の内幕だが、かの馬騾のように大失敗した將軍さえ、誅殺するという軍令が下されたとは一向に聞かず、かの孫歆の首を取ったと都へとどける勝報で述べながら、首を取られたはずの本人がピンピンしていたのと似たようなありさま。

4 句の注は、多分自注であろう。晉が吳を平定した戦役で、王濬の軍が孫歆の首を取りましたと報告したが、吳が平定されてみると孫は實は杜預の軍に生捕りにされていた。孫歆は正史に立傳

されておらず、唐人にとつても馬騮ほどおなじみでなかったか。

5・6 この二句は「實に一篇の樞要たり」と言う劉・余兩氏の意見（改訂重版李商隱詩選）に完全に同意する。ただ、舊版・重版とも6句「暇」「假」の異同について校記がないのはうなづけない。朱鶴齡本・馮浩本ともに「假」に作るので、ここは「重要な異文」なしと見たのか。本稿では底本以下の諸本により「暇」の字を取り、胡以梅の説に従つて解すればよいと考える。とにかく、聖天子のおひざもとに祥鳥鸞鷟に比ぶべき名臣賢臣たちがわっと集まり、おのずと天下太平の世を實現させるのが第一の緊要事で、それよりさきに鴟鵂みたような夷狄どもを歸順させるとか何とかそうした些事にかかずらうひまがどこにある（裏返して言うならば、中國さえまともに治まらずごたごたしているのに、外敵征伐のひまなんかあるか、となる）。

このあたりは暇と假の異同ともからみ、とりわけ複雑に説が分岐する。「假」を採る諸注の中でも、屈復が6句鴟鵂は君子に對しての「小人」であると獨特の見解を提出するが、近代の兩注釋は、森槐南が「李同捷などの惡人」安徽師大が「藩鎮」と共に馮浩をふまえた結論で一致する。ところが一方では「惡人の歸化は末である」という森に對立し、小人または藩鎮の跋扈は許しがたい、と「假」字の解釋では屈および安徽師大が一致している。

7・8 むかし漢の武帝の朝代——前朝においてせっかく開かれた玄菟郡がむざむざ荒廢の地と化して、ぼうぼうと生い茂る草むらのごとくに兵士の遺骸が積み重なり、殺氣をはらんだ雲が陣營の

上に深々と垂れこめていのではないか。ああ隋師の東征こそ何としても悔まれてならぬ。この詩が隋朝のことを歌う以上、「前朝」は隋朝でありえない。森槐南の説は明らかに誤まりだ。しかも玄菟郡は隋朝のみならず本朝の師の東征においても主戦場であった。本篇は義山が目睹せる何事かに觸發され隋代の故事を借りて激烈な言辭を列ねたので、大和初年に滄州景州を占據せる李同捷の征討がそのモチーフだ、とするのが朱鶴齡以下新舊の注釋者多數の見解であり、通鑑や舊唐書の地の文をそのまま一次史料として扱つてよいとすれば、一應は説の裏づけもある。しかしながらこの多數意見には些か問題がないわけではない。(一)玄菟郡（鴨綠江流域）Ⅱ滄・景（河北省南部）というのはいかにしても苦しく、(二)玄菟郡Ⅱ滄・景と置けるならば同時に玄菟郡Ⅱ中原となるはずで、なぜなら滄・景Ⅱ中原であるから。李同捷を忘恩の徒と罵る皇帝文宗の詔に曰く、「乃由留務之權。授以戎帥。拔負海之陋。置之中華。推恩舍垢。斯亦至矣」（舊唐書李同捷傳）胡以梅は正しくこの矛盾を突いた、「中原ノ二字は、結ノ處ト、如何ニセバ強イテ合セシムルヤ」絶對的なモチーフの特定が困難とすると、さしあたり純粹な詠史詩と受け取って置くのが無難だろう。しかし、この詩にはどうも何かの影がさしているようなのが氣になる。そこで、國を亡した煬帝の東征とまるで貨幣の表裏のごとく、國を亡しはしなかったが慘めな敗北に終った太宗李世民的東征への思いを、唐朝の詩人たる李義山として籠めた——こう考えるのは必ずしも不可能であるまい。託諷の對象としての太宗説はこれまで

現われなかったが、今後検討の餘地があるのではないか。

李同捷説を採る朱鶴齡および馮浩は本篇を大和二年、同じく張采田および安徽師大は大和三年にそれぞれ係ける。

(森瀬壽三)

杜工部蜀中離席98 杜工部蜀中離席

人生何處不離羣 人生何れの處か 離羣せざる

世路干戈惜暫分 世路 干戈 暫くも分るるを惜しむ

雪嶺未歸天外使 雪嶺未だ歸らず 天外の使

4 松州猶駐殿前軍 松州猶お駐まる 殿前軍

座中醉客延醒客 座中 醉客 醒客を延ぎ

江上晴雲雜雨雲 江上 晴雲 雨雲に雜わる

美酒成都堪送老 美酒 成都 老を送る堪し

8 當壇仍是卓文君 當壇は仍も是れ卓文君

校

0 唐詩鼓吹・唐詩類苑一〇七(人部別類)

杜 鼓吹元刊本「辟」 朱鶴齡本校注「一作辟。非」

席 錢本「席(?)」を「席」に改む

1 人生 高麗本「世人」

2 暫 鼓吹「暫」

3 雪 毛本校注「一作雲」

4 駐 鼓吹八卷本「住」

李義山七律集釋稿(七)

韻

上平二十文(羣・分・軍・雲・君)

朱鶴齡

0 此擬杜工部體也。

4 唐書曰。廣德元年。魚朝恩以神策軍歸禁中。永泰元年。又以神

策屯苑中。自是勢居北軍右。數出征伐有功。

何焯

〔讀書記〕起句尤似杜(評本「起用反喝。使曲折頓挫。杜詩筆勢也。暫字反呼堪送。杜詩脈絡也」)。○鮑令暉詩。人生誰不別。恨君早從戎。發端牽胎於此(評本「發端從休文別范安成詩變來。直用鮑令暉人生誰不別恨君早從戎二語耳」)。○一則干戈滿路。一則人麗酒濃。兩路夾寫出惜別。如此結構。眞老杜正嫡也(評本本條なし)。○詩至此。一切起承轉合之法。何足以評本無繩之。然離席起。蜀中結。仍是評本一絲不走也。○此等詩。須合全體觀之。不可以一句一字求其工拙。荆公只賞他次連。猶是皮相。

〔評本〕

5 醒席字。

7・8 美酒文君。仍與上醉醒雲雨雙關。

陸鳴皋

此總言聚散不常。遠使未歸。禁軍尙駐。皆離羣意也。五六句。正寫會聚無常之態。所以境不可執。當隨遇而安。風物佳處。即可娛老耳。

五七九

陸崑曾

明皇入蜀時。甫走依嚴武。至大曆中。始下江陵。是甫居蜀最久。義山擬爲是詩。直如置身當日。字字從甫心坎中流露出來。非徒求似其聲音笑貌也。起言人生斯世。何在不感離羣。況亂後獨行。能無黯然而際乎。雪嶺句。是外夷之干戈。松州句。是內地之干戈。兄上第二句意。接言我瞻四方。可棲託者惟蜀。卽此離別之項。座中延客。醉醒皆屬知心。江上看雲。晴雨無非好景。亦何能舍此遠去耶。結言文君美酒。可以送老。見天下擾擾。而成都獨宴然也。○義山詩。得力於杜。本集有擬杜五言一篇。雜之杜律中。不復可辨。附錄於後。

河清與趙氏昆季譙集得擬杜工部⁵¹⁷ 勝概殊江右。佳名逼渭川。虹收青嶂雨。鳥沒夕陽天。客餐行如此。滄波坐渺然。此中真得地。漂蕩釣魚船。

姚培謙

離羣何足恨。惟世路干戈。雖暫離亦可恨。領聯。敘干戈實事。中聯。寫離席。客醉則可以別矣。尚有醒者。何妨少留。雲晴則又將別矣。而仍雜雨雲。何妨少住。所謂惜暫分也。末又言當干戈搶攘之時。而得此美酒紅顏之席。眞乃一刻千金。那得不惜。

屈復

何處二字。暗提蜀中。干戈二字。明點時事。雪嶺之天使未歸。松州之禁軍猶駐。承干戈句。座中之客。忽醉忽醒。離席也。江上之景。忽雨忽晴。喻干戈也。時事如此。惟有文君之酒。差堪送老而已。雖無工部之深厚曲折。而聲調頗似之。

程夢星

此題元作杜工部蜀中離席。一作辟工部。朱長孺以爲非是。因注題下乃擬杜工部體也。此說不然。大凡擬詩。必原本其舊題。如江淹雜擬諸作可證。杜子美未嘗有蜀中離席之題。義山何從擬之。況義山與趙氏昆季譙五律。明言擬杜。何獨於此無擬字耶。以愚攷之。杜字誤也。義山本傳。柳仲郢鎮東蜀。辟爲判官檢校工部郎中。與題正合。其爲離席者。乃當時宴別送行實事也。首二語。言聚散無常。本不足惜。所可惜者。蜀中干戈未平而分手也。三四。承干戈實紀時事。仲郢之鎮在大中六年秋。是時蓬果羣盜。寇掠三川。山南西道節度封敖奏巴南有賊。上遣京兆少尹劉潼詣果州招諭之。此所謂天外使也。果州刺史王贊弘與中使似先義逸。引兵至山下。此所謂殿前軍也。其後巴南諸賊。竟以撲滅。作此詩時。當猶未靖。故曰未歸。曰猶駐也。五六。承離羣。寫譙錢席上情景。七八。結惜暫分。言己之不離蜀中者。無可如何。惟留連於酒壚調笑已耳。長孺以爲擬杜。遂併詩中事實。皆推本於杜之身世。引廣德永泰事。以注殿前軍。而於天外使。未有論說。誤矣。

紀昀

〔詩說上〕此擬工部之作。評本此句下有朱長孺所註長是穩午橋力註辟字非也二十二字集中韓翃舍人即事⁸²亦此例。謝靈運鄴中集詩。江文通雜擬。評本此作雜體詩。標題皆如此也。評本無起二句大開大合。極龍跳虎臥之觀。評本此作雜體詩。標題皆如此也。評本無領聯頂次。評本此作雜體詩。標題皆如此也。評本無頸聯正寫離席。○蒙泉評。評本無曰。題是離席。末二句留之也。○四家評曰。此等詩須合全體觀之。不以字句論工拙（評本本條なし）。

馮浩

乍看易解。細審則難會也。三四。若從杜工部時徵之。則舊書吐蕃傳。代宗寶應二年。遣李之芳崔倫使吐蕃。至其境而留之。廣德二年。放李之芳還。新書紀。廣德元年十二月。陷松維二州。舊書崔寧傳。永泰元年。陷西山柘靜等州。皆可引證。而未能盡符。若義山時言之。自太和至大中。唐與吐蕃。使問不絕。而史籍缺略。無可詳考矣。夫果專論時事。則下半何竟不相應。凡杜老傷時憂國之篇。有如是之安章措句者乎。此蓋別有寓意也。杜老往來梓閬。幸遇嚴公。參謀成都。義山斯行。大有望於東西川。而迄無遇合。故三四承干戈二字。略舉軍事。言外見旁觀者不得贊畫也。其曰世路者。兼言人情之爭勝也。時必有與之爲難者。五六。暗喻相背相軋之情。非關寫景。結則借指其人。言竟思據以終老。不肯讓人也。如此解。不特本章線索鉤連。且與後之壬申七夕¹⁶¹籌筆驛¹⁰¹之結聯。皆相印合也。題曰杜工部。北禽篇⁵²曰朝杜宇。或以暗寓杜悰。此則爲妄測歟。何曰。起句尤似杜。一則干戈滿路。一則人麗酒濃。兩路來寫出惜別。如此結構。眞老杜嫡派也。詩至此。一切起承轉合之法。何足以繩之。然離席起。蜀中結。仍是一絲不走。按何評論詩自妙。然亦皮相。

0 唐詩鼓吹注。謂懿宗時東川柳仲郢辟商隱爲判官檢校工部員外郎時作。故有謂當作辟工部者。義旣不可通。且時與地皆乖謬矣。

〔註補〕

0 只取下四字。不取杜姓。杜工部久客蜀。或借以自譽己之詩才。未可定也。

〔初刻本〕

3·4 舊新書言党項羌古析支之地。其界東至松州。又有雪山。党項居雪山下。當太和開成際。部落苦藩鎮貪恠。相率爲盜。會昌初。頻命使安撫之。至大中四年猶入掠。則使臣當有尙羈異域者。故曰雪山未歸天外使也。松州戍兵。當有爲禁軍行營者。故曰松州猶駐殿前軍也。或引太和三年十二月雲南蠻寇成都。命右衛將軍董重質爲左右神策及諸道行營西川都知兵馬使以伐之。然重質於四年卽移鎮夏綏矣。此事太在先也。又有謂大中五年白敏中罷相。節度鄒寧招撫党項都制置使。衛以神策兵。然敏中次寧州。不至松州。後至七年。乃移鎮西川。此事太在後世。皆不可符。凡義山吐辭製題。每有隱晦其跡者。此因遊成都。杜悰終不款延。故作歸計。曰杜工部者。寓杜悰之姓。與前得擬杜工部。首尾相應。前半就蜀中時事着筆。且以世路干戈。喻人情之爭競也。時必有與之爲難者。五六。暗喻相軋之情。非關夏景。結則借指其人。言美酒竟思送老。彼當讎者不肯讓與他人也。與後寄蜀客一絕錯綜比喻。對看自明。籌筆驛云梁父吟成恨有餘。亦此意也。

張采田

〔辨正〕首句點離席。雪山二句。以工部之時況今日。言天使仍稽雪嶺。前軍猶駐松州。言外見世路干戈。自己不能贊畫。翻使無才者排竿。所謂借暫分也。後聯。一醉一醒。或晴或雨。比喻顯然。結言成都美酒。可以送老。奈之何離羣而去哉。

馮氏係此詩於大中二年蜀遊。余攷大中二年義山遇李回。大抵在塗次相見。補編有爲回賀馬相啓可證。使果至成都。則杜悰正移西川。不應不謁見。而何以有早歲乖投刺之言邪。

案句見今月二日不自量度輒以詩一首四十韻干霄奪識。輒復五言四十

讀詩一章 此詩疑大中五年西川推獄時所作。否則大中七年。杜棕自西

川遷淮南。義山奉仲郢命至渝州迎候時所作。結語成都美酒。蓋戲而留之之詞。其爲悼作無疑。題云杜工部。或亦暗寓其姓耶。

〔會箋〕此擬杜工部體。集中如韓翃舍人卽事。卽其例。作辭者非首點離席。雪嶺二句。以工部之時況今日。言天使仍稽雪嶺。前軍尙駐松州。言外見世路干戈。需人贊畫。而已獨不預。故曰惜暫分也。後聯。一醉一醒。或晴或雨。比喻顯然。結云。成都美酒。可以送老。奈何使文君舊壤。而爲若輩所盤踞哉。離羣之恨淺。蔽才之歎深。細味詩意。是西川推獄時。追慨前遊失意之作矣。

黃侃

案此以蜀中離席爲題而擬杜體。猶五言有韓翃舍人卽事。以卽事爲題而擬韓舍人也。朱氏釋此題最當。程氏以爲杜工部應從一本作辟工部。非也。

郝天挺

0 懿宗時。柳仲郢節度劍南東川。辟商隱爲判官檢校工部員外郎時作。

廖文炳

此詩送別時在離席上而作也。首言人生于東南西北。有合則有離。何必嘆恨哉。但吾所惜者。適世路干戈之亂。又相別而去耳。何言世之亂。如雪嶺之兵使未歸。松州之殿軍猶住。此吾所以惜也。將別時。席中之客。醒醉相留。皆送別者。既別之際。江上之雲。晴雨相雜。皆關別情。且不盡之情。又欲再飲。蓋想成都之酒。可以送行。其當壇者。卽當時文君。酒卽當時文君之酒。舍此何以表不

盡之情哉。

0 懿宗時。柳仲郢節度劍南東川。辟商隱爲判官檢校工部員外時作。註。劍閣石如劍。向南曰劍南。向北曰劍北。當時亦有姓爲工部者。

王清臣·陸貽典

首言人生東西南北。有合有離。吾所惜者。世路干戈。又相別而去耳。如雪嶺之使未歸。松州之軍猶駐。此所謂世路干戈也。當此相別之時。席中之客。醉醒相半。江上之雲。晴雨相糅。勝友良辰。皆關別意。而成都酒。旣堪送老。當壇之女。仍是文君。則宜共爲流連也。其忍輕於言別哉。

金聖歎

前解 擬杜工部。便真是杜工部者。如先生餘詩。雖不擬杜工部。亦無不杜工部者也。蓋不直聲調皆是。維神髓亦皆是也。○起手七字。便是工部神髓。其突兀而起。淋漓而下。眞乃有唐一代無數鉅公。曾未得闢其籬落者。○一言大丈夫初非塵塵相聚。何故乃欲惜別。二言今日把袂流淚。亦祇爲世路干戈故耳。三四卽承寫世路之干戈言。如雪山之使未回。卽松州之軍猶駐。此不可不戒心者也。

後解 前解寫不應別。此解寫應不別也。醉客延醒客。言此地知己之多也。晴雲雜雨雲。言此地風景之美也。然則藉此美酒。便堪送老。帶甲滿地。又欲何之。當壇仍是之爲言。普天流血。而成都獨乾淨也。

近代注釋

〔森槐南〕下卷二六九頁。〔安徽師大〕一四二頁。〔陳永正〕一九頁。

* *

0 「吳喬答萬李堊詩問」又問少陵七律。異於諸家處。幸示之。答曰。如劍外忽傳收薊北等詩。全非起承轉合之體。論者往往失之。更有異體。如童稚情親篇。只須前半首。詩意已完。後四句以興足之。去後四句。於義不缺。然不可以其無意而竟去之者。如畫之有空紙。不可以其無樹石人物而竟去之也。義山人生何處不離羣篇。前有後無。全似此篇。故題曰杜工部蜀中離席。乃擬此篇而作也。……介甫謂義山深有得於少陵。而止讀雪嶺未歸一聯。是見其鍊句。而未見其鍊局也。杜甫の童稚情親篇とはすなわち「送路六侍御入朝詩」童稚情親四十年。中間消息兩茫然。更爲後會知何地。忽漫相逢是別筵。不分桃花紅勝錦。生憎柳絮白於綿。劍南春色還無賴。觸忤愁人到酒邊。

杜工部 杜甫の死後まもなく書かれた「樊晃杜工部小集序」工部員外郎杜甫。字子美。……君有宗文宗武。近知所在。漂寓江陵。〔國史補下敘著名諸公〕開元日。……位卑而名著者。李北海。王江寧。李館陶。鄭廣文。元魯山。蕭功曹。張長史。獨孤常州。杜工部。崔比部。梁補闕。韋蘇州。戴容州。

蜀中〔杜甫覽栢中丞除官制詞詩〕蜀中寇亦甚。柏氏功彌存。

離席 義山の五律にまた「離席」があり、いづれも別離の宴席をさし、離筵とはば同義。〔唐太宗餞中書侍郎來濟詩〕聊將分袂霑巾淚。還用持杯離席觴。以下の二例は席ヲ離ルの意。〔漢書六八霍光傳〕田延年前。離席按劍。〔謝眺送江水曹還遠館詩〕日暮有重城。何由盡離席。なお杜詩引得によれば、離席の語は詩題

・詩句ともに見えない。

1・2 何焯が指摘したように「玉臺新詠四鮑令暉擬青青河畔草詩」の兩句を踏まえるか。義山にまたやや似通った表現として「荆門西下78」人生豈得輕離別。天意何曾忘嶮巖。

1 人生 杜詩に計二七例、すべて句頭に用いられる。たとえば「贈衛八處士詩」人生不相見。動如參與商。〔垂老別詩〕人生有離合。豈擇衰盛端。

離羣 〔禮記檀弓上〕子夏曰。……吾離羣而索居。亦已久矣〔鄭注 羣謂同門朋友也〕。〔文選一三彌衡鸚鵡賦〕歸窮委命。離羣喪侶。〔杜甫留別賈嚴二閣老兩院補闕詩〕田園須暫往。戎馬惜離羣。

2 世路 〔崔駰達旨〕子苟欲勉我以世路。不知其跌而失吾度也。〔文選五五劉孝標廣絕交論〕世路險巇。一至于此〔李注 盧諶詩曰。山居是所樂。世路非我欲〕。〔杜甫春歸詩〕世路雖多梗。吾生亦有涯。

干戈 〔書說命中〕惟口起羞。惟甲冑起戎。惟衣裳在笥。惟干戈省厥躬〔孔傳 言服不可加非其人。兵不可任非其才〕。〔詩大雅公劉〕弓矢斯張。干戈戚揚。爰方啓行〔毛傳 戚。斧也。揚。鉞也。〕〔鄭箋〕干。盾也。戈。句子戟也。〔文選二七王粲從軍行五首之三〕身服干戈事。豈得念所私〔李注 孔安國尚書傳曰。戈。戟。干。盾也〕。〔又五三陸機辯亡論〕齊民免干戈之患。戎馬無晨服之虞。〔杜甫清明詩〕弟姪雖存不得書。干戈未息苦離居。その他杜詩に計三二例。

3・4 「杜甫嚴公廳宴同詠蜀道圖畫詩」劍閣星橋北。松州雪嶺東。

なお「井絡391」雪嶺松注參照、本誌五四册四三九頁。

「蔡寬夫詩話」王荆公晚年亦喜稱義山詩。以爲唐人知學老杜。而得其藩籬。惟義山一人而已。每誦其雪嶺未歸天外使。松州猶駐殿前軍。永憶江湖歸白髮。欲回天地入扁舟之類。雖老杜亡以過也（漁隱叢話前集二二）。

3 義山の「寫意392」天外山唯玉壘深の句注參照、本誌六〇册六九五頁。

雪嶺 「庚闌遊仙詩」神嶽竦丹霄。玉堂臨雪嶺（類聚七八）。

「文選一三謝惠連雪賦」臣聞雪宮建於東國。雪山峙於西域（李注漢書西域傳曰。天山冬夏有雪）。雪嶺は杜詩に計八例。

「馮浩注」按後漢書班超傳注。西域有白山。通歲有雪。亦名雪山。詳檢史志諸書。雪山綿亘遼遠。以界華戎。而自蜀徼言之。切近松維保諸州。唐初招撫党項羌而羈縻之。其後皆陷於吐蕃。通典曰。吐蕃國山有積雪。党項羌。漢西羌之別種。東界至松州。又有居雪山下。號雪山党項者。亦爲吐蕃所破而臣屬之。故吐蕃南路入寇。松維諸處最要衝。

天外使 「岑參送崔子還京詩」匹馬西從天外歸。揚鞭只共鳥爭飛。

4 松州 「馮浩注」通典（一七六）與舊書志（四一）。松州交川郡。歷代諸羌之域。唐置松州。有甘松嶺。江水所發之源。西北至吐蕃界九十里。貞觀初。置松州都督府。督羈縻州。皆招撫党項羌漸置。永徽以後。臣叛制置不一。なお元和郡縣志三二・新唐書地

理志四二參照。

「杜甫警急詩」玉壘雖傳檄。松州會解圍（九家注 傳檄言吐蕃入寇。檄書相聞也。松州正控吐蕃。趙云。：廣德元年。吐蕃取隴右。十二月。遂亡松維保三州。公詩在未亡松州之前）。

殿前軍 「杜甫三絕句之三」殿前兵馬雖驍雄。縱暴略與羌渾同（九家注 時神策軍恣橫。聞道殺人漢水上。婦女多在官軍中。

「陸贄緣邊守備事宜狀」今者。窮邊之地。長鎮之兵。皆百戰傷夷之餘。終年勤苦之劇。：然衣糧所給。唯止當身。例爲妻子所分。常有凍餒之色。：又有素非禁旅。本是邊軍。將校詭爲媚詞。因請遙隸神策。不離舊所。唯改虛名。其於廩賜之饒。遂有三倍之益。此則僞類所以忿恨。忠良所以憂嗟。疲人所以流亡。經費所以匱匱。

「馮浩注」新書（五〇兵）志。：自肅宗時。置殿前射生左右軍。元和中改天威軍。八年廢。以其兵分隸左右神策矣。邊兵多不贍。而戍卒給最厚。諸將務爲詭辭。請遙隸神策軍。以贏廩賜。緣是塞上往往稱神策行營。

5 「杜甫季秋蘇五弟纓江樓夜宴詩」老人因酒病。堅坐看君傾。義山にまた「龍池319」夜半宴歸宮漏水。薛王沈醉壽王醒。

座中 「南史五七沈約傳」約性不飲酒。：嘗侍宴。有妓婢師是齊文惠宮人。帝問識座中客不。曰。唯識沈家令。約伏地流涕。帝亦悲焉。爲之罷酒。「杜甫蘇端薛復筵簡薛華醉歌」坐中薛華善醉歌。歌辭自作風格老。

醉客 「三國魏志二七徐邈傳」鮮于輔進曰。平日。醉客謂酒清者爲聖人。濁者爲賢人。「杜甫陪柏中丞觀宴將士二首之一」醉客

霑鸚鵡。佳人指鳳凰。

延 [禮記曲禮上] 凡進食之禮。…主人延客祭(鄭注 延。道也)。…主人延客食。[漢書五八公孫弘傳] 起客館。開東閣以延賢人(師古曰。閣者。小門也。東向開之。避當庭門而引賓客。以別於掾史官屬也)。

醒客 用例未見。

6 義山にまた「雨中長樂水館送趙十五滂不及」³⁸³ 碧雲東去雨雲西。苑路高高驛路低。

江上 [杜甫寒雨朝行視園樹詩] 江上今朝寒雨歇。籬中秀色畫屏紆。この語、杜詩に計一九例。

晴雲 [蕭子雲贈海法師遊甌山詩] 沈寥晚霖霽。重疊晴雲新。[張謩九日宴詩] 秋葉風吹黃颯颯。晴雲日照白鱗鱗。[杜甫柏學士茅屋詩] 晴雲滿戶團傾蓋。秋水浮階溜決渠。義山には六朝のスタイルで晴雲を詠じた[齊梁晴雲³⁷⁸]がある。

雨雲 [呂氏春秋一三有氏覽] 山雲草莽。水雲角隴。旱雲煙火。雨雲水波。この語は杜詩になく、次の例などは恐らく雲雨と同義か。[方干贈美人四首之一] 粉胸半掩疑晴雪。醉眼斜廻小樣刀。

才會雨雲須別去。語慙不及琵琶槽。また方干の同じく第三首も6句と些か關連があるか。[又之三] 常恐胸前春雪釋。惟愁座上慶雲生。

7・8 [北夢瑣言三陳會螳螂賦條] 蜀之士子。莫不沽酒。慕相如滌器之風也。陳會郎中。家以當壚爲業。…大和元年及第。李相固言覽報狀。處分廂界。收下酒旆。闔其戶。家人猶拒之。逡巡賀登

第。

7 [杜甫江畔獨步尋花七絕句之三] 報答春光知有處。應須美酒送生涯。

美酒 [禮記內則] 漬。取牛肉。必新殺者。薄切之。必絕其理。湛諸美酒。期朝而食之。以醢若醢醢。[古詩一九首之十三] 不如飲美酒。被服紆與素。

成都 [蕭子顯代美女篇] 朝沽成都酒。暝數河間錢。[杜甫八哀詩贈左僕射鄭國公嚴公武] 豈無成都酒。憂國只細傾。杜詩には成都の語、計九例。義山の[碧瓦⁷⁹] 歌從雍門學。酒是蜀城燒。[國史補下敘酒名著者條] 酒則有郢州富水。…劍南之燒春。

送老 [杜甫秦州雜詩二十首之十四] 何時一茅屋。送老白雲邊。[漢書五七上司馬相如傳] 文君夜亡奔相如。相如與馳歸成都。

…與俱之臨邛。盡賣車騎。買酒舍。乃令文君當爐(郭璞曰。盧。酒盧。師古曰。賣酒之處。累土爲盧。以在酒瓮。四邊隆起。其一面高。形如鍛盧。故名盧耳。而俗之學者。皆謂當盧爲對溫酒火盧。失其義矣)。相如身自著犢鼻褌。與庸保雜作。滌器於市中。義山にまた[寄蜀客³³⁹] 君到臨邛問酒壚。近來還有長卿無。金徽却是無情物。不許文君憶故夫。

仍是 [白居易舊房詩] 床帷半故簾旌斷。仍是初寒欲夜時。[元稹城外回謝子蒙見諷詩] 潘安寄新詠。仍是夜深來。仍の字、詩語解下に「承轉之辭。或言二事。猶文用而字也」とし、シカモと訓ずるのに従う。仍是を「更有」とする安徽師大も同一見解か。卓文君 [杜甫琴臺詩] 茂陵多病後。尙愛卓文君。

* * *

0 詩題冒頭「杜」の字を「辟」に作る唐詩鼓吹元刊本では、郝天挺に従い「工部トシテ蜀中ニ辟サルノ離席」とよむべきか。鼓吹八卷本では「杜」に作っておりながら、郝注をそのまま受けつぐ廖文炳の眞意は定かでない。以後の諸注釋のうち、程夢星のみは明確に「辟」の字を採るものの、詩題のよみは郝氏とまた異り、「工部トシテ蜀中ニ辟サレオリシトキノ離席」とする。程氏の擬作否定の根據は薄弱で、すでに紀昀が文選詩の二例をあげて駁する通りである。「蜀中離席」なる標題は確かに杜詩には存在しないが、江淹雜擬の場合と同じく、いかにもありそうな詩題を義山が擬作したのであらう。それに關連して、廖・程および森槐南が「離席」を人の送別の席と解するのは非で、本篇は立ち去りがての成都を敢えて離れねばならぬ作者（＝杜甫）の心情を代辭し、1句「離羣」の二字も去り行く者の言葉にふさわしく、當然安徽師大などの解釋どおり留別の作とみなさねばならない。

1・2 人の生きるに際して、親しい仲間のもとを離れ去るのはいつどこでもないことがないが。世間はいま血腥い戦さ續きの故にしばしの別れにも後ろ髪ひかれる思い。兩句の微妙な轉折は姚培謙が見事に押えた。この二句の「人生」「干戈」をはじめとして、杜甫の愛用語が以下次々と現われる。義山が杜をよく學んだというのは、もとよりこうしたどちらかといえば外形の部分に止まらないはずだが、それにしても本篇における杜の語彙の氾濫は、義山がいかに杜詩をよく讀んでいたかを實證するものだ。

3・4 頷聯は諸注の説くように、2句干戈を受ける。夏にもなお雪の残る、成都の西北あの雪嶺の彼方、天の外側にも等しい吐蕃との係争の地への安撫の重任を帯びた使臣は未だ歸還せず、その雪嶺の聳える松州には依然として殿前軍すなわち近衛師團（を僭稱する）邊境守備の荒くれどもが駐屯したままだ。一體いつになったら太平の世となるのだらう。

5 離別の宴席で酔っぱらった客はしらふの客を請じ入れては盛んに酒を勧める。醒客は或いはすでに酔いの醒めた客か。またこの醒客を一向に醉えない杜甫自身とみるのは考えすぎだらうか。

6 場所が成都ゆえ江は當然岷江だ。しかし「或晴或雨、比喻顯然」という張采田の語にもかかわらず、一句の意は必ずしも顯らかでない。現に説は四つに分れる。

- (1) 純粹の敘景——陸崑曾・廖文炳・金聖歎・森槐南
- (2) 酒席の混雜——陸鳴皋・姚培謙・程夢星
- (3) 義山周邊の人間關係の煩雜——馮浩
- (4) 世路干戈——屈復・安徽師大・陳永正

これら四説が互いに絶對的に他を排除するとは考えられず、義山詩のあいまいさのまた一つの例となるが、今ひとまず(2)説に従い、さらに方干の二作を援用するならば、絶纓の會式の男女入り亂れての無禮講が連想される。

7・8 美酒で古來有名な成都こそ老いの餘生を送るべき街。酒客の相手をしてくれるのがおまけに卓文君と來てはこたえられぬところだ。しかしわたしは君たちから離れこの街を去る……。

誰の眼にも杜甫的と見える前解に比べ、後解は相當な落差があり、吳喬はそれを繪畫における餘白のごとしと片づけたが、馮浩は苦慮の末に杜悰まで持ち出し付會の袋小路に入った。が、もし馮氏の線で解決を目ざすならば、後解は風雲急な戰況のなか美酒美女にうつつをぬかす醉客どもへの諷刺だとみる安徽師大がすぐれ、これなら「杜老傷時憂國之篇」（馮浩）として完結する。

本詩の係年は、馮浩が大中三年、程夢星・張采田・安徽師大・陳永正が大中六年だが、張は辨正でなお大中五および七年説をものべる。ただし、3・4句に歌われるチベットとの國境紛争だけを殆ど唯一の頼りに係年を確定できるのかどうか。そもそも杜詩の擬作なのだから、製作年次と作中の國境紛争が重なっているという保證はなからう。さらには製作地だって蜀中ないし成都に限るまい。擬作ならたといえば長安でなされたとしてもおかしくない。

（松岡秀明）

安定城樓 295 安定城樓

迢遞高城百尺樓 迢遞 高城 百尺樓

綠楊枝外盡汀洲 綠楊枝外 盡く汀洲

賈生年少虛垂涕 賈生は年少 虚しく涕を垂れ

4 王粲春來更遠遊 王粲は春來 更に遠遊す

永憶江湖歸白髮 永に江湖に白髮に歸るを憶い

欲迴天地入扁舟 天地を廻して扁舟に入らんと欲す

不知腐鼠成滋味 知らざらき 腐鼠 滋味と成るとは
8 猜意鴛鴦難竟未休 意を鴛鴦に猜して 竟に未だ休めず
校

0 瀛奎律髓三九（消遣類）・唐詩類苑一五八（居處部樓類）

1 遞 全唐詩「滯」

2 枝 金聖歎本「以」

外 唐晉統籤「上」 朱本・全唐詩校注「一作上」

3 虛 高麗本「空」

涕 統籤・麗本・金聖歎本「淚」 朱本・全唐詩「淚」
稿本旁注「泪」

6 廻 麗本・全唐詩・律髓「回」

8 意 統籤「憶」

鴛 律髓・麗本・庫本「鴛」

難 錢本「鵲」

韻

下平十九侯（樓）十八尤（洲・遊・舟・休）同用

*

胡震亨

五六。王荆公深取之。以爲老杜無以過。

朱鶴齡。

0 按史。太和九年十月。王茂元爲涇原節度使。義山時往來其幕。

故有是詩。

朱彝尊

通首皆失意語。而結句尤顯。然茂元乃義山知己也。豈其然乎。

6 第六句尤奇。後人豈但不能作。且不能解。

何焯

〔讀書記〕第二評本言滿地江河作湖本欲歸即得。五六。言所以垂泪與

遠遊者。豈爲此腐鼠而不能捨無評本哉。吾誠永憶江河作湖本欲歸而優

游白髮。但俟廻旋天地功成却入扁舟耳。此二句亦是荆公一生心事。

故酷愛之。

〔評本〕統籤。五六。王荆公深愛之。以爲老杜無以過。

7 成滋味。在彼自成一滋味也。

徐德泓

此在涇原幕中作也。先寫城樓景色。次傷不遇如賈生而依人如王粲

也。五句。言無心戀此。六句。狀襟期空闊。皆從遠眺中寫出。腐

鼠二句。言若輩不知。疑其有所攘奪。蓋爲幕友云也。

陸鳴皋

江湖天地一聯絕似少陵。

陸崑曾

義山志在經世。爲令狐氏所擯。朝籍無名。又因就王鄭之辟。益加

猜忌。故感賦此詩。按唐書。安定郡屬關內道。太和中。王茂元爲

涇原節度使。義山在幕。詩應作於其時。上半言登高望遠之餘。俯

仰身世。何異賈生之遷長沙。王粲之依劉表耶。下半言所以垂泪遠

遊者。豈爲此腐鼠而不能舍然哉。吾永憶江湖。欲歸而優游白髮。

但必俟廻旋天地。功成却入扁舟耳。何猜意鵠鷄者之卒未有已也。

○王荆公極喜此詩。謂雖老杜無以過之。

姚培謙

此義山在茂元涇原幕中時作。百尺城樓。綠楊洲渚。邊地有此。亦

佳境也。其奈遇如賈生。遊同王粲。且賈生曾陳痛哭之書。吾則淚

猶虛淚。王粲曾作登樓之賦。吾更客中作客。悲在一虛字。一更字。

人生至此。百念頓灰。自念江湖之上。縱得歸時。已成白髮。天地

之內。欲成退步。惟有扁舟。乃世猶有不我諒者。欲以腐鼠之味。

猜意鷄雛。不亦重可怪乎。義山之隨茂元。令狐綯等深惡之。故其

言如此。

屈復

一登樓。二時。中四情。七八時事。一。上高樓而觀楊柳汀洲。忽

生感慨。故下緊接賈生王粲。遠遊垂淚。以賈有治安策。王有登樓

賦。五六。欲泛扁舟。歸隱江湖。己之本懷如此。而讒者猶有腐鼠

之嚇。蓋憂讒之作。

程夢星

義山博極羣書。負經國之志。特以身處卑賤。自噤不言。茲因人妄

相猜忌。全不知己。故發憤一傾吐之。然而立言深隱。略無誇大。

眞得三百詩人風旨。非他手可摹也。首二句。借城樓自喻。有立身

千仞。俯視一切之意。三四。歎有賈生之才而不得一擢。祇如王粲

之遊而窮於所住。五六。言本欲功成名立。歸老江湖。旋乾坤轉。

乃始勇退。七八。言己之意量如此。而彼庸妄者。方據腐鼠。以嚇

鷄雛也。豈不可哀哉。

紀昀

〔詩說上〕四家評。以逼眞老杜。信然。然使老杜爲之。末二句必

另有道理也（評本「四家以爲逼近老杜。是也。然使老杜爲之。末二句必不如此淺露」）。

〔評本〕刺同侶猜忌之作。○五六句。王荊公所賞。○欲廻句。言歸老扁舟。舟中自爲世界。如縮天地於一舟然。

馮浩

應鴻博不中選而至涇原時作也。玩三四顯然矣。其應鴻博不中。已因往依茂元之故。詳年譜。下半言我志願深遠。豈戀此區區者而俗情相猜忌哉。

0 按王茂元於太和九年節度涇原。至開成四年猶在涇原。詳年譜。

2 按（枝）若作上。謂高樓出綠楊枝上而覽盡江湖。似亦通。

5·6 陸園玉曰。永憶江湖。欲歸而優悠白髮。但必俟迴旋天地。

功成而却入扁舟。按言扁舟江湖。必須待旋乾轉坤。功成白髮之時。時方年少。正宜爲世用。而預期及此者。見志願之深遠也。解固如斯。要在味其神韻。何曰。此二句亦是王荊公一生心事。故酷愛之。

7·8 莊子（秋水）。惠子相梁。莊子往見之。或謂惠子曰。莊子來。欲代子相。惠子恐。搜於國中。三日三夜。莊子往見之。曰。

南方有鳥。名鵩。發於南海。而飛於北海。非梧桐不止。非練實不食。非醴泉不飲。於是鵩得腐鼠。鵩過之。仰而視之。曰。嚇。今子欲以梁國而我耶。按似兼用樂府升天行。鳳臺無還駕。簫管有遺聲。何時與爾曹。啄腐共吞腥之意。以喻婚於王氏之情事。

〔註補〕

5·6 預計他年功名成就。歸老江湖。仍抱不忘魏闕之意。則此時之所進取者。卑之不足道也。

張采田

〔辨正〕結句言我志趣遠大。豈羨此鴻博一舉。而世情相猜忌哉。腐鼠指鴻博。出以比喻。使耐人尋味。似不得以淺露目之。馮氏定此詩爲鴻博不中。歸至涇原所作。良是。

〔會箋〕賈生對策。比鴻博不中選。王粲依劉。比己爲茂元幕官。欲廻天地。永憶江湖。言我之所志甚大。豈戀此區區科第。而俗情相猜忌哉。義山一生。躁於功名。蓋偶經失志。姑作不屑語以自慰也。

黃侃

此詩作于王茂元涇原節度幕中。當時令狐綯輩。必有以義山背黨爲譏者。故有末二句。五六句。一意互言。言欲俟旋乾轉坤之後。歸老江湖。以扁舟自適也。當時黨人譏義山以放利偷合。輕薄無行。豈其然哉。

金聖歎

前解言今日我適在此安定。彼旁之人不知。則必疑我有所慕而特遠來。至何所得方乃舍去。此殊未明我胸前區區之心者也。夫我上高城。倚危樓。窺綠楊。見汀洲。方欲呼風亂流。乘帆竟去。何則滿懷時事。事事可以垂淚。時正春日。日日可以遠遊。大丈夫眼觀百世。志在四方。胡爲而曾以安定爲意哉。

後解上解。既明其近跡。此解。又說其本志也。言若疑我不憶江湖。則我不惟一憶。方且永憶。永憶之爲言。時時日日長在懷抱也。特自約得歸之日。必直至白髮之後者。細看今日之天地。必宜大作其旋轉。此事既已重大。爲時必非聊且。故知不至白頭。不入扁舟。

因而濡滯。尙似有冀也。此之不察而謂我有世間戀慕。嗟乎。鴟鴞得腐鼠。嚇鷄雛。固從來舊矣。

近代注釋

〔森槐南〕上卷五六二頁。〔劉若愚〕五〇頁。〔安徽師大〕三六頁。〔陳永正〕六五頁。

* *

0 安定

〔漢書二八下地理志〕安定郡。武帝元鼎三年置。〔元和郡縣志三關內道〕涇州安定。今爲涇原節度使理所。禹貢雍州之域。春秋時屬秦。至始皇。分三十六郡。屬北地郡。漢分北地郡置安定郡。即此是也。魏太武神䴥三年。於此置涇州。因水爲名。管縣五。

：保定縣上。本漢安定縣地。涇水在縣東一里。〔舊唐書三八地理志〕涇州上。隋安定郡。天寶。戶三萬一千三百六十五。口十八萬六千八百四十九。在京師西北四百九十三里。至東都一千三百八十七里。

城樓 〔王粲登樓賦李善注〕盛弘之荊州記曰。當陽縣城樓。王仲宣登之而作賦。〔杜甫放船詩〕已泊城樓底。何曾夜色闌。杜甫

にまた〔登兗州城樓詩〕あり。

1・2 〔杜甫閬州東樓筵奉送十一舅往青城縣詩〕曾城有高樓。制古丹樓存。迢迢百餘尺。豁達開四門。游目俯大江。列筵慰別魂。

〔李益同崔邠登鶴雀樓詩〕鶴雀樓西百尺檣。汀洲雲樹共茫茫。

〔許渾咸陽城東樓詩〕一上高城萬里愁。兼葭楊柳似汀洲。

1 迢遞 義山にまた〔月夕216〕草下陰蟲葉上霜。朱欄迢遞壓湖光。〔文選二八謝朓鼓吹曲〕迢遞起朱樓。李周翰注〕迢遞。高貌。な

お〔和友人戲贈二首之二267〕1句の注參照、本稿四本誌五七冊七二頁。

高城 〔荀子議兵〕故堅甲利兵不足以爲勝。高城深池不足以爲固。嚴令繁刑不足以爲威。〔玉臺新詠五何遜日夕望江贈魚司馬詩〕日夕望高城。耿耿青雲外。〔杜甫晚秋陪嚴鄭公摩訶池泛舟詩〕高城秋自落。雜樹晚相迷。

百尺樓 義山の〔霜月8〕百尺樓南水接天を參照、七絕集釋稿

〔本誌五〇冊四六〇頁。〕

2 綠楊

〔王融古意詩〕巫山彩雲沒。淇上綠楊稀。〔李白贈錢徵

君少陽詩〕白玉一杯酒。綠楊三月時。

枝外 用例未見。

汀洲 〔楚辭九歌湘夫人〕搴汀洲兮杜若。將目遺兮遠者〔王逸注汀。平也〕。〔玉臺新詠六吳均與柳惲相贈答六首之一〕黃鸝飛上苑。綠芷出汀州。〔杜甫早發射洪縣南途中作〕汀洲稍疎散。風景開快悒。

3・4

〔杜甫久客詩〕去國哀王粲。傷時哭賈誼。〔又春日江村五

首之五〕羣盜哀王粲。中年召賈誼。登樓初有作。前席竟爲榮。：

異時懷二子。春日復含情。〔白居易代書詩一百韻寄微之〕賈生離

魏闕。王粲向荆夷。義山の文に〔上漢南盧尚書狀〕越賈生賦鵬之

鄉。過王子登樓之地。

3

〔史記八四屈原賈生列傳〕賈生。名誼。雒陽人也。年十八。以

能誦詩屬書聞於郡中。廷尉乃言賈生年少。頗通諸子百家之書。

文帝召以爲博士。是時賈生年二十餘。最爲少。天子議以爲賈生

任公卿之位。絳灌東陽侯馮敬之屬盡害之。乃短賈生曰。雒陽之人。少初學。專欲擅權。紛亂諸事。於是天子後亦疏之。不用其議。乃以賈生爲長沙王太傅。〔漢書四八賈誼傳〕誼數上疏陳政事。多所欲匡建。其大略曰。臣竊惟事勢。可爲痛哭者一。可爲流涕者二。可爲長太息者六。

賈生 〔杜甫別蔡十四著作詩〕賈生慟哭後。塞落無其人。引得
によれば杜詩に見える賈誼の名は一四例。

年少 〔杜甫少年行二首之二〕黃衫年少來宜數。不見堂前東逝
波。その他、杜詩には計五例。

虛 義山にまた〔賈生398〕可憐夜半虛前席。不問蒼生問鬼神。

垂涕 〔古詩十九首之十六〕徙倚懷感傷。垂涕沾雙扉。〔史記
八四屈原賈生列傳贊〕太史公曰。余讀離騷天問招魂哀郢。悲其志。
適長沙。觀屈原所自沈淵。未嘗不垂涕。想見其爲人。

4 〔文選一一王粲〔李注 魏志曰。王粲。字仲宣。山陽人。獻帝
西遷。粲從至長安。以西京擾亂。乃之荊州依劉表。後太祖辟爲右
丞相掾。魏國建。爲侍中卒〕登樓賦〕登茲樓以四望兮。聊暇日以
銷憂。：挾清漳之通浦兮。倚曲沮之長洲。：雖信美而非吾土兮。
曾何足以少留。〔又二三王粲七哀詩二首之一〕西京亂無象。豺虎
方遘患。復棄中國去。遠身適荆蠻。〔又之二〕荆蠻非我鄉。何爲
久滯淫。

〔杜甫短歌行贈王郎司直〕仲宣樓頭春色深。〔又將赴荆南寄別
李劍州弟詩〕春風回首仲宣樓。

王粲 〔杜甫通泉驛南去通泉縣十五里山水作〕傷時愧孔父。去

國同王粲。杜詩に見える王粲の名は計一二例。

春來 〔文選二二玉臺新詠四顏延之秋胡詩〕春來無時豫。秋至
恆早寒。〔杜甫歸雁詩〕春來萬里客。亂定幾年歸。春來の語は杜
詩に七例。

遠遊 〔楚辭遠遊〕悲時俗之迫阨兮。願輕舉而遠遊。〔曹植遠
遊篇〕遠遊臨四海。俯仰觀洪波。〔杜甫秦州雜詩二十首之一〕滿
目悲生事。因人作遠遊。遠遊の語は杜詩に五例。

5・6 〔史記一二九貨殖列傳〕昔者越王勾踐。困於會稽之上。乃
用范蠡計然。：遂報彊吳。觀兵中國。稱號五霸。范蠡既雪會稽之
恥。乃喟然而歎曰。計然之策七。越用其五而得意。既已旋於國。
吾欲用之家。乃乘扁舟。浮於江湖。變名易姓。王安石が激賞せる
二句。前引の蔡寬夫詩話參照、〔杜工部蜀中離席98〕3・4句注
（五八四頁）。

5 〔南齊書五四高逸傳序〕易有君子之道四焉。語默之謂也。故有
入廟堂而不出。徇江湖而永歸。隱遯紛紜。清迹萬品。〔杜甫公安
送韋二少府匡贊詩〕時危兵甲黃塵裏。日短江湖白髮前。〔杜牧漁
父詩〕白髮滄浪上。全忘是與非。

憶：歸 義山の〔二月二日100〕萬里憶歸元亮井の注參照、本稿
（）本誌五六冊二九九頁。

江湖 〔莊子大宗師〕泉涸。魚相與處於陸。相煦以濕。相濡以
沫。不如相忘於江湖。〔文選二八謝靈運會吟行〕范蠡出江湖。梅
福入城市。〔杜甫舟月對驛近寺詩〕皓首江湖客。鉤簾獨未眠。江
湖の語、杜詩には三三例。

白髮 「左思白髮賦」 星星白髮。生于鬢垂。なお、白髮の語は杜詩に二三例。

6 廻天地 「荀子儒效」 俄而原仁義。分是非。圖回天下於掌上。而辨白黑。豈不愚而知矣哉（楊倞注 回。轉也）。〔文選六〇陸機弔魏武帝文〕 夫以廻天倒日之力。而不能振形骸之內。濟世夷難之智。而受困魏關之下。〔杜甫奉寄韋十侍御詩〕 指麾能事回天地。訓練強兵動鬼神（九家注 趙曰。指麾所能之事。雖天地亦可回。誇大言之。）。

扁舟 「漢書九一貨殖范蠡傳注」 孟康曰。特舟也。師古曰。音匹延反。〔廣韻下平二仙韻扁字注〕 小舟。〔庾信哀江南賦〕 吹落葉之扁舟。飄長風於上游。〔杜甫破船詩〕 平生江海心。宿昔具扁舟。この語、杜詩に一六例。

7・8 「莊子秋水」 舊釋馮浩の項參照、五八九頁。〔文選四三嵇康與山巨源絕交書〕 不可自見好章甫。強越人以文晷也。已嗜臭腐。養鴛鴦以死鼠也。吾頃學養生之術。方外榮華。去滋味。游心於寂寞。以無爲爲貴。縱無九患。尙不顧足下所好者。

7 不知 「白居易和郭使君題枸杞詩」 山陰太守政嚴明。吏靜人安無犬驚。不知靈藥根成狗。怪得時聞吠夜聲。

滋味 「莊子盜跖」 且夫聲色滋味權勢之於人。心不待學而樂之。體不待象而安之。夫欲惡遷就。固不待師。此人之性也。〔杜甫九月一日過孟十二倉曹十四主簿詩〕 清淡見滋味。爾輩可忘年。

8 猜意 用例未見。
鴛鴦 「司馬相如子虛賦」 其上則有宛雛孔鸞。騰遠射干（張揖

曰。宛雛似鳳。〔漢書五七本傳〕 〔廣韻一鶴字注〕 鶴雛似鳳。〔經典釋文二七莊子音義中〕 李云。鶴雛。鸞鳳之屬也。鶴・宛ともに廣韻上平二十二元の鴛字紐に屬し、三字は音通。

* * *

本篇を初めて開成三年（八三八）に係けたのは程夢星（重訂李義山年譜）で、馮浩がこの年の鴻博すなわち博學宏詞科應募落選さらに王氏との婚姻以後の作と考定し、以後それが張采田、安徽師大と受けつがれる。いづれにせよ、大和九年（八三五）以來涇原節度使として涇州にあった王茂元のもとに身を寄せる若き義山が失意ないし憤懣を歌う作。ちなみに律體消遣類の序にいう、「詩人ニ多ク所謂ル消愁遣興ノ作有リ。必ズ深ク物理世故、人情天道ニ達セル者ニシテ、乃チ能ク眞ノ消遣ノ言ヲ爲ス。否ンバ則チ表ニ由ルニ非ザル也」

1・2 天までとどかんばかりにそり立つ、高き城壁の上の百尺の樓よ、（のぼりつめて見はるかせば）楊柳のみどりの茂りの彼方、目路の限りに涇水の平らかな中洲がつづく。迢遞は概ね平面的な距離のへだたりをさすが、ここでは非常に高きの形容。汀洲はむろん楚辭の語彙で、3・4句に南方楚の地へと遠遊する二人の人物を登場させる伏線となる。

3 あの賈生すなわち賈誼は、年少の天才として文帝に見出され重く用いられようとしながら、經世濟民の志なかばにして群小どものそねみで左遷され、湘の川のはとり、屈原をしのびつつ空しく涙を垂れ。

4 あの手は、まず洛陽から長安へ、長安から春の季節にさらに
荊州へと、これまた不遇をかちつつ遠くへ遠くへと悲しみの旅
を續けて行かなければならなかった。3句の年少Ⅱ賈生の組合せ
は問題ないが、登樓賦にしても七哀詩にしても春とは無關係で、
春來Ⅱ王粲と結ぶ表現は杜詩を踏まえるにちがいない。前半二連
には登樓賦の影が濃いが、それにも増して杜詩こそがこの詩全體
の骨格をかたちづくるものといってよい。杜詩的なのは單に次の
一連だけではないのである。

5 賈生・王粲にこの身を引きくらべたくなるほどわたしは不遇の
若輩だが、官界政界に乗り出す前から、常に心にとどめて忘れぬ
のは、人間を暖かく包み・眞に解放してくれる川と湖の世界、江
湖へ歸つてゆくこと、だがそれが可能になるのは、白髮老年に至
つてであるけれど。

6 甘露の變以後、危機に瀕する現下の政情を一新するのは、天地
をぐるぐる回轉させるような大事業だが、もしその使命さえ果た
せたなら、いかなる地位も名譽も求めることなく、ひとひらの小
舟に乗つて江湖へと隠れ去るつもりなのだ。

7・8 ところで、何としたことか、腐った鼠の肉が滋味となるな
どとは思ひもよらなかつたが、その腐った鼠を盗まれまいと、練
實しか食わぬ鴛鴦に嚇とわめいたあの鴝鵒よろしく、全く見當ちが
いの猜疑をどうしてもふり拂えないやつが存在しているとは。こ
の比喩は、義山の幕友の嫉視(徐德泓)に對し、自分は何らかの
利祿(安徽師大)を求めてわざわざ當地に遠遊したのではない

(金聖歎)、という主旨だろう。鴝鵒を令狐綯一派に當て(黃侃)、
腐鼠を王氏との婚事(馮浩)あるいは鴻博(張采田)に當てるの
は、いずれも付會の説にすぎない。各句に異文があるがすべて底
本に従うべきである。

(茂木信之)

水齋 525

水齋

多病欣依有道邦 多病 有道の邦に依るを欣び
南塘晏起想秋江 南塘に晏起して 秋江を想う
卷簾飛燕還拂水 簾を卷くも飛燕は還た水を拂い
4 開戸暗蟲猶打窗 戸を開くも暗蟲は猶お窗を打つ
更聞前頭已披卷 更に聞す前頭已に披きし卷
仍斟昨夜未開頃 仍つて斟む昨夜未だ開かざりし頃
誰人爲報故交道 誰人か爲に故交に報じて道え
8 莫惜鯉魚時一雙 惜しむ莫れ鯉魚の時に一雙なるをと

校

0 唐詩類苑一六三(居處部齋類)

3 卷 叢刊本・類苑・稿本・統鑑・毛本・麗本・金聖歎本「捲」

4 開 麗本「閉」 稿本旁注「閉」 錢本「開」を「？」に改め

再び「開」に改む

5 頭 毛本「題」 稿本旁注「題」 朱本・馮本「題」^{一作} 全唐

詩「題」^{一作}

6 頃 諸本みな「缸」 底本「甕」 錢本校注「甕」 馮本校注

「一作項。同」底本の「覺」は字書になく馮浩の引く一本に従つて改む。或いは「覺」の形訛か

韻

上平四江（邦・江・窗・項・雙）

*

何焯

〔讀書記〕一病忽忽。疑已入秋。及見飛燕拂水。暗蟲打牕。始覺猶是夏令。寫病後眞入神。更閱已披之書。仍斟昨夜之酒。水齋之中。病夫所以遣日者賴此。如此寂寞無聊。評本無。二字不能出戶。惟望故交時時書至。以當披寫。亦字字是多病人心情也。○前四句。或作多病之後。日想秋爽。而恨其猶然夏令。亦復佳（評本 本條なし）。○落句。或地主病中疎闊相接。故云爾（評本 本條なし）。

3・4 簾已捲而飛燕燕下評本有燕字拂水不入。戶已開而暗蟲打牕評本休作未休。是多病晏起即目事。

〔評本〕故交却要他人爲言。豈相依初指哉。

陸鳴皋

次聯。寫水齋光景如畫。落句。雖寄書意。而引用仍不脫題。

陸崑曾

此詩寫病後情景。字字入神。起言病體煩躁。日想秋涼。豈知飛燕暗蟲。仍然夏令。簾已卷矣。而燕還拂水。是不知入也。戶已開矣。而蟲猶打窓。是不知出也。此共見之景。人却寫不到。又病後健忘。故書卷每須再閱。病後量減。故酒缸多有未開。此同具之情。人却說不出。結言水齋中獨自無聊。惟望故人信來。以當晤語。然誰爲

報知。而使之時時慰我耶。

姚培謙

此因水齋之寥寂。而想友朋之樂也。多病依人。空齋獨處。常想秋江浩蕩。一洗胸懷。無如卷簾則但見飛燕拂水而去。開戶則猶見暗蟲打窗而出。孤寂極矣。於是已披之卷。重復翻閱。未開之缸。聊復細斟。不知讀書飲酒。皆不可無故交伴也。其如書札尙未能常通何。

屈復

前半。水齋秋景。五六。情事。七八。因水齋而念鯉魚之久疎也。

○此重到水齋之作。

紀昀

〔詩說下〕何以不取水齋也。曰。了無佳處。且有累句（評本 本條なし）。

問卷簾飛燕還拂水。開戶暗蟲猶打窗二句。聲調如何。曰。此與求之流輩豈易得。行矣關山方獨吟。撫躬道直誠感激。在野無賢見自驚。聲調相同。意以下句第五字平聲救之也。憶中州集中如此句法亦有二處。古人必有原本。非落調也。然亦不必效爲之（評本 本條なし）。

馮浩

陸曰。起言病體煩躁。日想秋涼。豈知卷簾開戶。仍然夏令。又病後善忘。故書須再閱。病後量減。故酒多未開。田（蘭芳）云。五六。已開劍南門庭。唐人雖中晚餘韻。猶沾溉不少。浩曰。集中言病多矣。此章情味。必廢罷還鄭州時方合。詩格亦是老境。故以爲

編年之末。

2 南塘。與前諸詩之南塘異（後出2句南塘の注參照）。

3・4 何曰。簾已捲而飛燕拂水不入。戶已開而暗蟲打窗不休。是多病晏起卽目事。

〔初刻本〕初定永樂閑居時作。細玩氣味。態度音節。與本集絕不類。次句亦無著。必誤收入者。當移三卷存疑。

張采田

〔辨正〕首句言有道邦。當指洛京。此必會昌五年在洛居憂所作。時義山多病。詳祭外舅文。馮氏謂是晚年作。非也。

南塘當在京中。與曲江相近。令狐當有別館在焉。集中屬意子直諸篇。多舉南塘蓮塘爲言。義山在京。疑亦寓居於此。此句蓋迴想京居秋涼景況。馮氏謂與他篇南塘不同。則未細味此篇語意矣。

〔會箋〕馮編病廢鄭州。與首句不合。鄭本義山故鄉。不得謂欣依有道也。而次句南塘。又與諸詩南塘大異。略似永樂閑居時。而寫景亦不細符。無從懸揣矣。

金聖歎

前解 此只是水齋晏起詩。然必須看其特地晏起。却已是起得甚早。如三四之燕還拂水。蟲猶打窗。此俱是侵早景物。而人情又皆已謂爲晏起。則眞所謂有道之邦者也。○沃土之民不材。晏起故也。瘠土之民莫不向義。相戒不許晏起故也。夫多病斯不得不晏起也。乃今又反以此邦爲道而欣依之者。夫居家早起。固實能却一切病也。後解 卷是前頭已披。缸是昨夜未開。想見水齋盤桓已久。然則七八之一雙鯉魚。正是怪其前此之契闊。非是望其後此之殷勤也。

* *

0 水齋 〔南史五三羊侃傳〕性豪侈。善音律。：初赴衡州。於南

簷齋起一間通梁水齋。飾以珠玉。加之錦繡。盛設帷屏。列女樂。乘潮解纜。臨波置酒。綠塘傍水。觀者填咽。〔白居易府西池北新

葺水齋卽事招賓偶題十六韻〕繚繞府西面。潺湲池北頭。鑿開明月峽。決破白蘋洲。清淺漪瀾急。實緣浦嶼幽。直衝行徑斷。平入臥

齋流。：夾岸鋪長覽。當軒泊小舟。枕前看鶴浴。床下見魚游。

1 多病 杜甫の愛用語、杜詩引得によれば一九例。たとえば〔登

高詩〕萬里悲秋常作客。百年多病獨登臺（九家注 洙曰。相如多病。病臥於茂陵）。〔漢書五七下司馬相如傳〕常有消渴病。與卓氏婚。

饒於財。故其仕宦。未嘗肯與公卿國家之事。常稱疾閑居。不慕官爵。〔又五〇汲黯傳〕黯多病。臥閤內不出。歲餘。東海大治。稱

之。〔南史二一王僧佑傳〕（王儉）答曰。臣從非敢妄同高人。直是愛閑多病耳。〔孟浩然歲暮歸南山詩〕不才明主棄。多病故人疎。

義山にまた〔寓興513〕薄宦仍多病。從知竟遠遊。

有道邦 〔論語公冶長〕子曰。寧武子。邦有道則知。邦無道則

愚。其知可及也。其愚不可及也。〔又衛靈公〕子曰。：君子哉蘧

伯玉。邦有道則仕。邦無道則可卷而懷之。〔漢書二六天文志〕景星者德星也。其狀无常。常出於有道之國。

〔文選一六潘岳閑居賦〕有道吾不仕。無道吾不愚（李注引公冶長衛靈公兩篇）。何巧智之不足。而拙艱之有餘也。於是退而閑居

于洛之浹。身齊逸民。名綴下士。

2 南塘 〔樂府古辭西洲曲〕採蓮南塘秋。蓮花過人頭。〔羊士諤

寄江陵韓少尹詩」蜀國魚牋數行字。憶君秋夢過南塘。

「前諸詩之南塘」(馮浩)の諸詩とは、馮が大中三年に係ける即日その他の作をいう。「即日³²⁵」何人書破蒲葵扇。記著南塘移樹

時(馮注 南塘在京城南。杜詩遊何將軍山林。不識南塘路。今知

第五橋。許渾題韋曲野老村舍詩。背嶺枕南塘。數家村落長。又

南塘移樹。記一時之蹟也。：似暗寓令狐綯之移宅。在大中三年漸

貴時也。以下每書晉昌矣)。「子直晉昌李花⁵¹⁶馮注」集中橫塘蓮塘

芙蓉塘外。南塘等字。必皆指綯所居者。義山詩に散見する南塘を

馮は概ね令狐綯と關係のある地名と考えているが、本篇のそれは例外視する。

晏起 「禮記內則」凡内外。雞初鳴。咸盥漱。衣服。斂枕簟。

灑掃室堂。及庭。布席。各從其事。孺子蚤寢晏起。唯所欲。食無

時。「文選九潘岳射雉賦」恐吾游之晏起。慮原禽之罕至。

秋江 「王昌齡重別李評事詩」莫道秋江離別難。舟船明日是長

安。「杜甫秋興八首之四」魚龍寂寞秋江冷。故國平居有所思。「又

雨晴詩」天路看殊俗。秋江思殺人。故國愁眉外。長歌欲損神。

「溫庭筠細雨詩」楚客秋江上。蕭蕭故國情。

3 「盧綸早秋望華清宮中樹詩」燕拂宜秋霽。蟬鳴覺晝空。「李紳

江南暮春寄家詩」江鴻斷續翻雲去。海燕差池拂水回。義山にまた

「越燕二首之一⁹⁶」拂水斜文亂。銜花片影微。

卷簾 「樂府古辭西洲曲」卷簾天自高。海水搖空綠。「崔湜同

李員外春閨詩」卷簾雙燕入。披幌百花驚。「杜甫閨詩」卷簾唯白

水。隱几亦青山。

飛燕 「古詩十九首之十二」思爲雙飛燕。銜泥巢君屋。「杜甫

赤霄行」江中洶河嚇飛燕。銜泥却落羞華屋。「又秋興八首之三」

信宿漁人還汎汎。清秋燕子故飛飛。

拂水 「李白魯東門觀刈蒲詩」揮鎌若轉月。拂水生連珠。

4 開戶 「韋應物城中臥疾詩」秋風起漢泉。開戶望平蕪。

暗蟲 「白居易聞蟲詩」暗蟲唧唧夜繇繇。況是秋陰欲雨天。

「元稹會真詩三十韻」啼粉流清鏡。殘鐘^{才調集太平廣記並作殘鐘}遠^{廣記並作殘鐘}暗蟲。

打窗 「白居易上陽人樂府」耿耿殘燈背壁影。蕭蕭暗雨打窗聲。

「杜牧宣州開元寺南樓詩」可惜和風夜來雨。醉中虛度打窗聲。

5 前頭 (1)「雜寶藏經三」有夜叉鬼。：語實客言。不疲極也。載

是水草。竟何用爲。近在前頭。有好水草。從我去來。當示汝道

(正藏四卷四六五頁)。「白居易池畔閑作兼呈侍中詩」前頭何所

有。一卷晉公詩。

(2)「白居易對酒勸令公開春遊宴詩」時泰歲豐無事日。功成名

遂自由身。前頭更有忘憂月。向上應無快活人。自去年來多事故。

從今日去少交親。宜須數數謀歡會。好作開成第二春。「又哭劉尚

書夢得詩」夜臺暮齒期非遠。但問前頭相見無。b「醜女緣起」醜

女既得世尊加被。換舊時之醜質。作今日之面旋。醜陋形軀。變端

嚴之相好。敢得貌若春花。夫主人來全不識。：夫主人來全不識。却

覓前頭醜阿婆(敦煌變文集七九八頁)。

前題 「馮浩注」釋名。書稱題。審諦其號也。亦言第。因其第

次也。北史儒林李業興傳。愛好墳籍。鳩集不已。手自補修。躬加

題帖。其家所有。垂加萬卷。

披卷

〔宋書四一孝武文穆王皇后傳〕左光祿大夫江湛孫敷當尚世祖女。上乃使人爲敷作表讓婚。曰。夕不見晚曉。朝不識曙星。至於夜步月而弄琴。晝拱袂而披卷。一生之內。與此長乖。〔唐太宗帝京篇〕披卷覽前蹤。撫躬尋既往。

6 昨夜

〔文選二七鮑照還都道中作〕昨夜宿南陵。今旦入蘆洲。なお〔無題山〕昨夜星辰の注參照、本誌五三冊六一三頁。

開項

〔杜牧獨酌詩〕窗外正風雪。擁爐開酒甌。

〔說文解字注五下〕缸。項也。〔瓦部〕。項似甕。長頸。受十斗。

缸與項音義皆同也。史漢貨殖傳皆曰醢醬千項。从缶工聲。〔廣韻

一〕缸。甕缸。項。同上。

7・8

義山にまた〔井絡391〕將來爲報奸雄輩。莫向金牛訪舊蹤。

7 誰人

〔李白遠離別詩〕海水直下萬里深。誰人不言此離苦。

〔韓愈和武相公早春聞鶯詩〕早晚飛來入錦城。誰人教解百般鳴。

爲報

〔李白寄遠詩〕瑤臺有黃鶴。爲報青樓人。〔岑參赴北庭

度隴思家詩〕隴山鸚鵡能言語。爲報家人數寄書。〔雲谿友議上巫

詠難條〕秣歸縣繁知一。聞白樂天將過巫山。先於神女祠粉壁大署

之曰。蘇州刺史今才子。行到巫山必有詩。爲報高唐神女道。速排

雲雨候清詞。

故交

〔玉臺新詠六吳均擬古四首携手詩〕故交一如此。新知詎

憶人。〔李白書懷贈南陵常贊府詩〕故交不過門。秋草日上階。

8

〔文選二七飲馬長城窟行〕客從遠方來。遺我雙鯉魚。呼兒烹鯉

魚。中有尺素書。

莫惜

〔李白送友人遊梅湖詩〕莫惜一雁書。音塵坐胡越。

鯉魚

〔孟浩然送王太校書詩〕尺書能不悵。時望鯉魚傳。

一雙

〔禮記少儀〕其禽。加於一雙。則執一雙以將命。委其餘。

〔許渾喜遠書詩〕此日南來使。金盤鯉一雙。

* * *

0

古く南史に見える水齋は、二艘の舟の上に建てられているが、本篇は白詩のそれと同じく單に水邊の居室である。いわゆる水齋なるものの唐代における建築様式などはむろんよく分らない。作者が水齋に起居して病身の憂愁を歌ったとする點で舊釋は一致する。ただ、屈復が「重ネテ水齋ニ到ルノ作」という根據は未詳。

1

病氣がちのわが身にとって、よく治まれる有道の邦に寄留するのは喜ばしいこと。開口一番まず杜甫を思わせる「多病」の語が置かれる、こうした表現から作者が故郷以外のいずれかの地に居るのだとは推測できても（張氏會箋）、その地を洛陽とまで決める（張氏辨正）のは強引すぎる。

2

南の池のほとりで心ゆくまで朝寝してから起き出してみれば、何となく心に浮かぶ秋江の風景。南塘はどことも知れぬただの南の池であって、令狐綯と關係づける（張氏辨正）のはやはり強引にすぎ、張氏はのちに自説を否定（會箋）している。晏起についての金聖歎の發言は些かピント外れのようだが、要するに有道の邦だからこそ晏起が可能になるのだらう。また眼前の南塘から秋江が連想され、そこからさらに懷郷の念が湧くとも考えられる。

——王昌齡以下の秋江の用例からすれば。

3・4 晏起してさて簾を巻き上げたが、燕は依然戸外の水面をか

すめて飛び廻るばかり。扉も開けたが、暗がりの室内に潜んでい
た蟲は外へ出ようと（愚かにも）まだ窓にぶち當りぶち當りして
いる。二句は何焯の解釋に従う。暗蟲は、元白の用例によれば暗
闇の中に鳴き又は暗中に見え隠れする蟲。

5・6 前から読みさしにしてあった巻をもう一度読み繼ぎ、昨夜
はまだ開けてなかった酒がめを開けてまた飲みつつける。5句前
頭については、(1)場所(2)時間の兩義のうち、下句の昨夜との對比
を考えて時間の方を採りたい。ただ、前頭が過去に動く用例は變
文の例を除き未見なのが痛い。白詩の二例いずれも未來を指す。

毛本その他の「前題」ならば、以前に題簽を記入した(書物)の
意で、屈復が「重到水齋之作」というのもその邊りに由來するか
もしれない。しかしこれでは昨夜といかにも釣合いが悪く、にも
かわらず朱氏・馮氏が敢えて前題を選んだのは、これなら前の
字がまちがいなく過去に動くからだろうか。6句仍は「相因而及
之辭」(助字辨略一)、従前の狀態(昨夜の飲酒)がなおまた引
き續くのを表わす。

姚培謙が仍斟を細斟とよみかえるのは、仍をシキリニと訓じ、
ちびりちびりないしはグイグイやると解したか。

7・8 誰か(私の)ために古なじみの友に傳えてくれまいか、時
には鯉の一對——見舞のたよりの一つもよこせ、それくらいの骨
惜しみはするなと。

この詩は、道・卷・開の三字がそれぞれ重複する。紀昀のう
果句とはそれらを指すか。

馮浩は大中十二年、義山の最晩年に係け、張采田は辨正で會昌
五年に係け、會箋で不編年とする。安徽師大年表も係年せず。こ
うした作品を輕率に係年すべきでないのはもとよりのことだが、
1句有道邦を當地の節度使などへの挨拶的言辭とし、それに多病
を結びつけるとすれば、義山が病いをしばしば口にする梓州在任
時代の作という可能性はみとめられよう。

(中原健二)

復至裴明府所居 386 復た裴明府の所居に至る

伊人卜築自幽深 伊の人 卜築 おのずか 自ら幽深

桂巷杉籬不可尋 桂巷杉籬 尋ぬ可からず

柱上雕蟲對書字 柱上の雕蟲 對して字を書し

4 槽中瘦馬仰聽琴 槽中の瘦馬 仰ぎて琴を聽く

求之流輩豈易得 之を求むるも 流輩には豈得易からん

行矣關山方獨吟 行け 關山に方に獨り吟ぜよ

賒取松醪一斗酒 松醪一斗の酒を賒取し

8 與君相伴灑煩襟 君と相伴い 煩襟を灑がん

校

0 唐詩類苑一三一(人部感舊類)

3 蟲 叢刊本・稿本・高麗本「虫」 錢本「虫」を「蟲」に改む

4 瘦 朱本「秣」 馮本「秣」一作瘦

6 矣 麗本「笑」

7 膠 錢本「膠」に作り旁注「膠」

韻

下平二十一侵（深・尋・琴・吟・襟）

*

朱彝尊

工部之驛。宋人之俑。

何焯

〔讀書記〕

5・6 此等要非佳處。

〔評本〕前四句。都與一煩字反對。○腹連。兩路夾出復至緣由。

徐德泓

首二句。寫地之幽深。三四句。狀居之清雅。雕蟲。言對聯。客至。故有馬也。五句。謂裴。六句。自謂。因獨吟故又引出結意。

此種格調。已踞宋元首座。然不從絢爛中來。亦不能到此境。

陸崑曾

以明府而卜築幽深。便非流輩所及。宜義山切伊人之慕。而每過所居。輒生戀戀也。桂巷杉籬。是野人之居。曰不可尋。正見幽深處。三四。言明府居此。何所事事。亦惟樂琴書以銷憂耳。山谷云。如蟲蝕葉。偶爾成文。言書法之若不經意也。雕蟲句卽此意。荀子云。伯牙鼓瑟。六馬仰秣。見琴聲之能感異類也。秣馬句用其事。下半言明府其人。求之流輩。豈易多得。惜我有事行役。不獲常與君作伴耳。今猶幸未去。能不思賒取斗酒。以灑我煩襟也哉。

姚培謙

李義山七律集釋稿（七）

此見俗士之無可與語也。幽深至不可尋處。人跡絕矣。雕蟲如對書字。秣馬猶解聽琴。甚言人世之無可與語也。我今茫茫流輩。閱歷已多。落落關山。獨吟無侶。松醪一斗。不携至此處談心。而更欲何往耶。

屈復

一二。明府所居之幽不可尋者。復至。歎賞之詞。三。居之幽。四。物之幽。五。贊明府。六。自嘆飄流。七八。賓主合結。○不可尋。是幽深注脚。三四宜發揮此意。而柱上二句。泛寫非法。盛唐必不如此。

紀昀

〔詩說下〕何以不取復至裴明府所居也。曰。三四。拙笨。五六。似江軾健以江西派。祇可偶一爲之耳（評本「三四。拙笨。五六。似江西派詩。偶一爲之。亦自可喜」）。

問求之流輩豈易得行矣關山方獨吟。香泉（汪存寬）以爲要非佳處。如何。曰。江西詩派矯拔處。亦自可喜。然生硬粗俚。亦有一種儉父面目。絕可厭惡處。此曲防流弊之言。最爲有旨。學者不可不知也。予亦以爲只可偶一爲之耳（評本 本條なし）。

馮浩

5・6 何曰。此種要非佳句。錢（良擇）曰。工部之驛。宋人之俑。是將行役敘別之作。

張采田

〔會箋〕馮氏云。是將行役敘別之作。

*

*

0

義山は以前にも裴明府の住居を訪れ五律一篇を残している。

〔裴明府居止416〕愛君茅屋下。向晚水溶溶。試墨書新竹。張琴和古松。坐來聞好鳥。歸去度疎鐘。明日還相見。橋南賣酒醺。

裴明府 馮浩によれば裴衡の可能性ありとされる。〔寄裴衡282

題下注〕按宰相世系表。裴衡。字無私。系出東眷坊〔中華書局校

點本二二三七頁〕。文集有代表裴無私祭文。疑即此人。祭文云。經

黃鬚白。疑後之與裴明府詩。亦即此人。若與陶進士書中之裴生似

非也。〔文集六爲裴懿無私祭薛郎中文題下注〕今檢表。有裴衡字

無私。憲宗相伯之弟輩。而思謙之兄輩也。思謙當即見唐撫言開成

時科第事者。時次似可合。而本集有寄裴衡詩。疑即此無私也。

また他の作者の詩題に見える裴明府についても馮浩がふれる。

〔裴明府居止題下注〕許渾有晨至南亭呈裴明府詩。時代既同。南

亭在京郊。似即此裴明府。許渾にはいま一首、〔酬郭少府先奉使

巡勞見寄兼呈裴明府詩〕なお時期がややずれるが、三者の作を念

のためあげて置く。〔姚合送巢縣裴明府詩〔英華二七八〕〕〔無可

送宜春裴宰^{一作明府}是將軍見之孫詩〕〔雍陶送宜春裴明府之任詩〕

そのほかに義山文集中の裴姓の人物として、元和八年に没した

仲姊の夫たる裴允元がある。〔補編一一請盧尚書撰李氏仲姊河東

裴夫人誌文狀〕年十有八。歸於河東裴允元〔錢注 新舊唐書裴耀

卿傳。新唐書宰相世系表皆不載〕。故侍中耀卿之孫也。

明府 〔後漢書張湛列傳一七〕建武初。爲左馮翊。主簿進曰。

明府位德尊重。不宜自輕〔李賢注 郡守所居曰府。明府者。尊高

之稱。前書韓延壽爲東郡太守。門卒謂之明府。亦其義也〕。〔容齋

四筆一五官稱別名條〕唐人好以它名標榜官稱。今漫疏於此。以示

子姪之未能盡知者。…下至縣令曰明府。丞曰贊府贊公。尉曰少府

少公少仙。〔賓退錄九〕唐人稱縣令曰明府。而漢人謂之明廷。見

范曄書張儉傳。明府以稱太守。山陰老叟稱劉寵。劉翊稱种拂。高

獲稱鮑昱。皆然。

所居 前注に引く後漢書注參照。また劉長卿に〔過鄭山人所居

詩〕あり。

1 伊人 〔詩秦風蒹葭〕所謂伊人。在水一方〔毛傳 伊。維也。

〔鄭箋〕伊當作繫。繫猶是也〕。〔陶淵明桃花源詩〕黃綺之商山。

伊人亦云逝。義山にまた〔李肱所遺畫松詩書兩紙得四十韻560〕伊

人秉絃圖。顧盼擇所從。

2 卜築 〔史記四周年本紀〕成王在豐。使召公復營洛邑。…周公復

卜。申視。卒營築。居九鼎焉。〔南史四九劉訐傳〕曾與〔族兄〕歙

聽講鍾山諸寺。因共卜築宋熙寺東澗。有終焉之志。〔孟浩然冬至

後過吳張二子檀溪別業詩〕卜築依自然。南溪不敢穿。義山の文に

〔文集六爲外姑隴西郡君祭張氏女文〕卜室築居。言遷穎上。

幽深 〔易繫辭上〕是以君子將有爲也。將有行也。問焉而以言。

其受命也如響。无有遠近幽深。遂知來物。〔文選二三禰衡鸚鵡賦〕

故其嬉游高峻。栖峙幽深。飛不妄集。翔必擇林。〔杜甫望牛頭寺

詩〕牛頭見鶴林。梯逕繞幽深。

2 桂巷 用例未見。

杉籬 用例未見。

不可尋 〔文選三〇陸機擬行行重行行〕遊子眇天末。還期不可

尋。

3

〔漢書三〇藝文志〕六體者。古文奇字篆書隸書繆篆蟲書（師古曰。：蟲書謂爲蟲鳥之形。所以書幡信也）。皆所以通知古今文字。摹印章。書幡信也。

柱上

〔庾信周大將軍義興公蕭公墓誌銘〕名書柱上。策滿帷中。

雕蟲

〔法言吾子〕或問吾子少而好賦。曰。然。童子雕蟲篆刻。

俄而曰。壯夫不爲也。

書字

〔庾信傷王司徒褒詩〕迴鸞抱書字。別鶴繞琴弦（倪璠注

索靖草書狀曰。蓋草書之爲狀也。婉若銀鉤。漂若驚鸞。舒翼未發。若舉若安）。〔宋之問奉和三會寺應制詩〕瑞鳥呈書字。神龍

吐浴泉。

4

〔馮浩注〕荀子（勸學）。伯牙鼓琴。而六馬仰秣。淮南子（說山訓）作駟馬。注曰。仰秣。仰頭吹吐。謂馬笑也。御覽（五七九）引琴書。師涓。紂樂官。善鼓琴。感四馬噓天仰秣。或曰師曠。傳雖二。疑卽是一。

瘦馬

〔杜甫瘦馬行〕東郊瘦馬使我傷。骨骼硤兀如堵牆。〔又

房兵曹胡馬詩〕胡馬大宛名。鋒稜瘦骨成。〔李賀崇義里滯雨詩〕

瘦馬秣敗草。雨沫飄寒溝。

秣馬

〔左傳成公十六年〕蒐乘補卒。秣馬利兵（杜注。秣。穀

馬也）。脩陳固列。蓐食申禱。明日復戰。〔漢書七二貢禹傳〕古者

宮室有制。宮女不過九人。秣馬不過八匹。

聽琴

〔庾信小園賦〕鳥何事而逐酒。魚何情而聽琴。

5

求之〔詩周南關雎〕窈窕淑女。君子好逑。○窈窕淑女。寤寐

求之。求之不得。寤寐思服。

流輩

〔文選四〇沈約奏彈王源〕源頻叨諸府戎禁。豫班通徹。

而託姻結好。唯利是求。玷辱流輩。莫斯爲甚。〔北史六八賀若敦傳〕敦恃功負氣。顧其流輩。皆爲大將軍。敦獨未得。：每出怨言。

〔白居易感秋詠意詩〕須知流輩年年失。莫歎衰容日日非。義山の文にまた〔文集二爲濮陽公陳許奏裴遵充判官狀〕伏以前任大理評

事。已三十三箇月。比於流輩。已是滯淹。伏請特授憲官。充臣觀察支使。

易得

〔漢書三四韓信傳〕（蕭）何曰。諸將易得。至如信。國

士無雙。王：必欲爭天下。非信無可與計事者。〔杜甫醉歌行贈公

安顏少府〕神仙中人不易得。顏氏之子才孤標。

6

行矣〔漢書九七上外戚衛后傳〕（平陽）主因奏子夫送入宮。

子夫上車。主拊其背曰。行矣（師古曰。拊謂摩循之也。行矣。猶今言好去）。強飯勉之。卽貴。願無相忘。詩語解下に、「行矣去矣ハ殷勤スル之辭一張相匯釋六に、「好去、居者安慰行者之辭」

關山〔文選二六謝朓暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚詩

（李注。蕭子顯齊書曰。謝朓爲隨王子隆文學。子隆在荊州。：世祖朓可遷都。朓道中爲詩。以寄西府）。徒念關山近。終知反路

長（李注。古樂府有度關山曲。王粲閑邪賦曰。關山介而阻險。顏延年秋胡詩曰。反路遭山河）。義山にまた〔念遠489〕關山已搖落。

天地共登臨。

獨吟

〔文選三〇陸機擬古詩十二首擬涉江采芙蓉〕故鄉一何曠。

山川阻且難。沈思鍾萬里。躑躅獨吟歎。〔白居易郡中閑獨寄微之

及崔湖州詩」酒散君無同宿客。詩成長作獨吟人。

7 除 「杜甫復愁十二首之十」如今九日至。自覺酒須除。「白居易勸詩」十千一斗猶除飲。何況官供不著錢。

取 張相匯釋三に「語助辭、猶着也」として武則天如意娘詩以下の用例をあげる。義山にはあと一例「越燕二首之二97」記取丹山鳳。今爲百鳥尊。

松醪 「潭州20」8句の注參照、本稿(一)本誌五四冊三八七頁。

一斗酒 「崔國輔雜詩」與酤一斗酒。恰用十千錢。「杜甫飲中八仙歌」李白一斗詩百篇。

8 「張繼酬趙尚書看花見寄二首之二」日暮歸鞍不相待。與君同是醉鄉人。

相伴 「梁簡文帝詠內人晝眠詩」夫婿恆相伴。莫誤是倡家。

「孟浩然夜泊宣城界詩」離家復水宿。相伴賴沙鷗。「白居易對酒自勉詩」猶堪三五歲。相伴醉花時。義山にまた「野菊25」細路獨來當此夕。清樽相伴省他年。

煩襟 「杜甫雲詩」高齋非一處。秀氣豁煩襟。「白居易東樓南望八韻」已豁煩襟悶。仍開病眼昏。

* * *

裴明府の居を訪れた先行作品そして本篇の製作年次・場所は未詳。馮浩・張采田および安徽師大年表いづれも係年せず。義山が裴明府の人柄を稱えた詩であるのは一見明白で、解釋の態度も舊注ほぼ一致するが、5・6一連の句作りのみは些か問題視されている。

1・2 このひとが慎重に考慮してすまいを定めたのは、まったくこのひとらしく静かな奥深い所であって、桂のしげりあう杣道のかなた、まがきのようにめぐる杉木立のなか、なかなか尋ねあてることができない。伊人はむろん詩經の語。桂巷・杉籬は義山以外の用例未見だが、恐らく人の手で植えられた樹木ではあるまい。また、桂・杉のとり合わせは香を媒介とするもののようである。

「呂溫同恭夏日題尋眞觀李寬中秀才書院詩」微風但覺杉香滿。「皮日休包山祠詩」風送杉桂香。「又陳先輩故居詩」杉桂交陰一里餘。「又重玄寺元達好種名藥因題二章之二」桂煙杉露濕袈裟。

3 兩側の柱には蟲食いのあとが、文字を書き記したように残ってあたかも對聯を掛けたかに見える。徐德泓・陸崑曾は、對聯の書法が雕蟲のごとし、と解するが、姚培謙に従う。

4 かいばを食んでいた瘦せ馬が、桶から首をあげてこのひとの彈くすばらしい琴の音を聞く。朱鶴齡系各本および馮浩本は瘦馬を「秣馬」に作るが、3句雕蟲との對の關係から、また瘦骨等々豊かなイメージを連想させる底本のままのほうが勝る。瘦馬には義山の自己投入もあるか。

5・6 舊説は、5句が裴明府のことで「之ヲ流輩ニ求ムルモ……」とよみ、6句が去り行く作者自身のことだという。しかしそれでは、(一)求之が完全に無用の字句となり、(二)内容的にも全く空虚な世辭で、(三)折角訪れたかと思えば自らは早くも辭去の意を表し、そのあと7・8句では酒を汲み交すと歌うなど文脈が支離滅裂だ。(四)結局馮浩のいう行役敍別の作とならざるをえぬが、詩題に一言

もそれを出さぬのがおかしい。

そこで、この二句ともに裴明府への語りかけと考え、句作りは2字+5字だとみたい。「之」すなわち君子の好逑、裴明府自身に匹敵するほどの相棒を(あなたが)求めたとて、同輩諸氏のなかにはとても簡単には見つからない。さあ、どうか元氣を出してやって行くのです、遙かに重なる山々こそまさしく(あなたが)獨り詩を吟ずるのにふさわしい。獨吟とあるが、ここは孤獨寂寥よりむしろ積極的に、裴明府ほどの高士ならば當然獨立獨行してしかるべし、と激勵したのだ。關山がもし郷關を暗示するのなら、いずれは隱退をとの含みを持たせているかもしれない。

紀昀はこの一連を「輟健」と評し、また「江西派に似たり」ともいう。散文的句法の詩への持ちこみといい、それに關連して一句の中における明確な分節・分斷といい、平板平滑を嫌い意識的にギクシャクした表現を作り出す江西派の技法と確かに共通性がある。こうした、中國古典詩學における「健」の概念については、荒井健『『滄浪詩話』と『潛溪詩眼』(本誌五四冊)参照。なお5句易の字は平でなければ定型から外れるが、もし平であれば今度は孤平となってしまう、このあたり韻律的にも問題が残る。

7・8 では松のどぶろくを一斗ほどもしっかり買いこんで、あなたに御一緒に、お互い煩しきでいっぱいの胸のうさをさあっと洗い流すことに致しましょう。

(矢淵孝良)

子初郊墅 388 子初の郊墅

看山對酒君思我 山を看 病に對し 君は我を思い
聽鼓離城我訪君 鼓を聽き 城を離れ 我は君を訪ぬ
臘雪已添牆下水 臘雪は已に添う 牆下の水
4 齋鐘不散檻前雲 齋鐘は散ぜず 檻前の雲
陰移竹栢濃還淡 陰は移る竹栢 濃還た淡
歌雜漁樵斷更聞 歌は雜う漁樵 斷えて更に聞ゆ
亦擬村南買煙舍 亦た擬す村南に煙舍を買い
8 子孫相約事耕耘 子孫相約して耕耘を事とせんと

校

0 唐詩鼓吹・唐詩類苑二四(地部郊類)・詩學禁鬱

郊 鼓吹八卷本「別」

1 對 禁鬱「酌」

3 牆 禁鬱「橋」 馮本校注「禁鬱作橋。非」

4 鐘 類苑・毛本・高麗本「鍾」

5 陰移 名家詩法本禁鬱「雲陰」

竹 禁鬱「松」

7 村 禁鬱「城」

煙 麗本「田」

韻

上平二十文(君・雲・聞・耘)

本篇は首句不入韻、七律としては變例。松尾良樹「李義山詩韻譜」(本誌五四冊三七七頁)参照。

何焯

*

〔讀書記〕起連中便籠罩得子孫世世相好在。買舍耕耘。恰從腹連生下。評本。作六。更無起承轉合之迹。○第五。所以息機。第六。所以發興。曲盡郊居之樂。評本有。事字。○中四句。一片烟波。孟德所謂以之地底。泥水自蔽也。

7 村南作城南。方是郊外（評本 本條なし）。〔評本〕腹連的是郊墅。讀之覺耳目閒都無塵雜。却又不至清淨寂寞。曾流連淮海先生碧山莊三日。時維初夏。頗有此意。

3 至墅。

4 同飲。○當午。

5 漸晡。

6 將歸。

7·8 反結暗歸字收繳。對起。

陸鳴泉

中四句。承訪字而寫郊墅之景也。一下一上。一近一遠。

陸崑曾

惟子初思我。故出郊訪之。起二句。乃對舉中之互文也。臘雪句。

言歲將暮。記一年之節序也。齋鐘句。言時近午。記一日之時刻也。

五句是郊墅所見。六句是郊墅所聞。昨嵐（陳嘯）云。此詩起聯中便籠罩得子孫世世相好在。而買舍耕耘。却從腹聯生下。更無起承轉合之迹。

姚培謙

看山對酒。郊外也。聽鼓離城。出郊也。中二聯。極寫郊外之景物。身羈城內。不知郊墅閒如許受用。焉得不思卜居鄰竝。舍塵鞅而樂耕耘耶。

屈復

因思君我而訪君。遂至郊墅。中四。皆郊墅之景。如此佳勝。欲結隣終老也。

紀昀

〔詩說上〕直寫樸老。風格殊高（評本「亦自朴老」）。○芥舟評。評本。無本。曰。君思我我訪君。二句。作此調用在起聯。評本。作句。故只覺脫洒。不嫌油俗。評本。作清。亦以其襯貼字面雅淨。評本作所。無字。若吳梅村偷。評本。無。用於領聯云。青衫。評本憔悴卿憐我。紅粉飄零我憶卿。則俗不可耐矣。

馮浩

筆趣殊異義山。結聯情態亦不類。但未敢直斥其非本集耳。餘詳子初全溪作81。又曰。禁樹以此篇爲一句造意格。謂起聯一意領下也。以篇意篇392（本稿內本誌六〇冊六九二頁）爲兩句立意格。謂起聯分領次聯三聯也。又以月姊曾逢篇265（本稿內本誌五七冊七〇七頁）爲想像高唐格。其說拘滯支離。皆不可從。詩本坦途。何強尋障礙耶。

7·8 何曰。作城南方是郊外。按諸本。多作村。城南韋曲之類。詩家每云村舍也。

〔註補〕

7 村南 史記魏其武安侯傳。丞相嘗使籍福請魏其城南田。通鑑。開元時。太子太師蕭嵩嘗賂內謁者監以城南良田數頃。則城南固美

田。然此切指郊墅之村南。乃結鄰同井之意。非泛言耳。佩文韻府引之作村。

〔初刻本〕結聯。與義山移家樊南亦不合。玩年譜自明。

張采田

〔會箋〕馮氏云。筆趣殊異義山。結聯情態亦不類。箋曰。馮說甚是。此必他人和作而誤入者。與全溪一首。皆可疑也。

廖文炳

此詩因過子初別墅而作也。首言君在別墅思我。我又適來訪君。至此別墅。見臘雪已消。而添墻下之水。鐘聲未散。猶有檻前之雲。又見竹栢之影。或淡或濃。聞漁樵之歌。或斷或續。此皆別墅之景物也。子初于此誠爲嘉遯。我亦擬買烟舍同居。使子孫期約。以耕耘爲事。何必以祿仕爲哉。

王清臣・陸貽典（廖文炳との異同を記す）

（一）此詩：作也↓なし。（二）在別墅↓方。（三）我又↓而我。（四）而↓新。（五）有↓停。（六）又見↓且。（七）聞↓なし。（八）或斷或續↓時斷時續。（九）期↓相。（十）何必：爲哉↓將焉取富貴爲哉。

金聖歎

前解 寫自訪子初。却先寫子初見憶。便見兩人相歡之深。本如磁鐵相吸。何況又有好墅耶。看他看山對酒妙。聽鼓離城又妙。寫一箇思之深。一箇去之早。總是意思都在尋常往還之外。固不可以賓主二字淺律之也。三。臘雪。是紀此日相訪。是初春。四。齋鐘。是表此日到墅。是晌午。二句。只承我訪君之三字也。後解 此方寫郊墅之佳。看他人訪郊墅。却欲自買郊墅。乃至欲令

兩家子孫世世同有郊墅。眞乃心醉今日子初郊墅。不淺也。

范梈

一句造意格 子初郊墅（正文略）初聯。上句以與下句。而下句乃第一句之主意。第二聯三聯。皆言郊墅之景。末聯。結句羨郊墅之美。亦欲卜隣于其間。有悠然源泉之意。此乃詩家最妙之機也。

* *

0 子初 この人物は傳記未詳だが、關連作品がある。

〔子初全溪作84〕全溪不可到。沉復盡餘醕。漢苑生春水。昆池換劫灰。戰蒲知雁唳。皺月覺魚來。清與恭聞命。言詩未敢廻（馮浩注。程曰。太和九年二月。以鄭注言。發左右神策千五百人浚曲江及昆明池。詩當作於此時。徐《逢源》曰。全唐詩有張衆甫。字子初。清河人。河南府壽安縣尉。僑居雲陽。後拜監察御史。爲淮南軍從事。義山同時人。疑卽其人也。浩曰。程說據舊書紀。然不可拘也。若張衆甫者。其詩高仲武登之中興閒氣集。文苑英華有權德輿撰子初墓誌。云建中三年三月終於家。是安得與義山同時哉。徐說誤矣。若以詩格論。贈宗魯筇竹杖。確是義山意趣。若此章五六之刻鏤。與本集相近而大不同。結聯意調亦不類。其後子初郊墅篇。輕婉之態。亦異本集。余初斥在卷末。然與其過疑。毋寧過慎。故仍收之。

〔贈宗魯筇竹杖130〕大夏資輕策。全溪贈所思。靜憐穿樹遠。滑想過苔遲。鶴怨朝還望。僧閑暮有期。風流眞底事。常欲傍清羸（馮浩注。宗魯。未知何人。詩亦云全溪。疑其人名宗魯。字子初。或是兩人。未可定也。其年當長於義山）。

郊墅 〔新唐書一二〇崔玄暉傳〕三世不異居。家人怡怡如也。

貧寓郊墅。羣從皆自遠會食。無它爨。

1 〔李白酬岑勛見尋就元丹丘對酒相待以詩見招詩〕對酒忽思我。長嘯臨清颿。

看山 〔陶淵明乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪詩〕晨夕看山川。事事悉如昔。〔宋之問江亭晚望詩〕望水知柔性。看山欲斷魂。

〔白居易閑居詩〕看山盡日坐。枕帙移時眠。

對酒 〔文選二九李陵與蘇武詩三首之二〕遠望悲風至。對酒不能酬。〔又二七魏武帝短歌行〕對酒當歌。人生幾何。

2 聽鼓 義山にまた〔聽鼓38〕城頭疊鼓聲。城下暮江清。なお〔無題二首之一11〕7句聽鼓の注參照、本稿(一)本誌五三册六一五頁。

離城 〔姚合送崔約下第歸揚州詩〕滿座詩人吟送酒。離城此會亦應稀。〔項斯寧州春思詩〕失意離城早。邊城任見花。

3 臘雪 〔劉禹錫送陸侍御歸淮南使府詩〕泰山呈臘雪。隋柳布新年。〔杜牧雪中書懷詩〕臘雪一尺厚。雲凍寒頑癡。

牆下 〔孟子盡心上〕五畝之宅。樹牆下以桑。匹婦蠶之。則老者足以衣帛矣。〔韓愈早春與張籍遊林亭詩〕牆下春渠入禁溝。渠冰初破滿渠浮。

4 齋鐘 〔敕修百丈清規八鍾條〕大鍾。叢林號令資始也。…聖節看經。上殿下殿。…齋粥過堂人定時。各一十八下。…齋粥下堂時。放參時。旦望巡堂。喫茶下床時。各三下〔正藏四八卷一一五五頁〕。〔白居易同錢員外題絕糧僧巨川詩〕齋時往往聞鐘笑。一食

何如不食閑。

檻前 〔杜甫題新津北橋樓詩〕白花簪外朵。青柳檻前梢。

5 陰移 〔玉臺新詠八紀少瑜建興苑詩〕日落庭花轉。方幃屢移陰。竹柏 〔文選五左思吳都賦〕踰踰竹柏。獮豸杞枏。〔又二二左

思招隱詩二首之二〕峭蒨青葱閒。竹柏得其真〔李注〕峭蒨。鮮明貌。孫卿子曰。桃李萼榮於一時。時至而後殺。至於松柏。經隆冬而不彫。蒙霜雪而不變。可謂得其真矣。

濃還淡 〔杜甫大曆三年春放船出瞿塘峽四十韻〕杳冥藤上下。濃淡樹榮枯。

6 歌雜 用例未見。

漁樵 〔何遜夕望江橋示蕭諮議楊建康江主簿詩〕爾情深羣洛。予念返漁樵。〔杜甫閨夜詩〕野哭幾家聞戰伐。夷歌是處起漁樵。

斷更聞 〔玉臺新詠六王僧孺攜衣詩〕別鶴悲不已。離鸞斷更續。7 村南 〔陶淵明移居二首之一〕昔欲居南村。非爲卜其宅。〔白

居易村夜詩〕霜草蒼蒼蟲切切。村南村北行人絕。煙舍 〔陶淵明歸園田居五首之一〕曖曖遠人村。依依墟里煙。

8 相約 〔史記四〇楚世家〕秦昭王遣楚王書曰。始寡人與王約爲弟兄。…而今秦楚不驩。則無以令諸侯。寡人願與君王會武關。面相約。結盟而去。寡人之願也。〔李白江上贈賈長史詩〕相約相期何太深。棹歌搖艇月中尋。

耕耘 〔荀子子道〕夙夜興寐。耕耘樹藝。手足胼胝。以養其親。〔文選一班固東都賦〕女脩織紉。男務耕耘。〔元稹代曲江老人百韻詩〕秋田耕耘足。豐年雨露頻。

* * *

早春の村里に友人を訪ねる作。詩人の五官はのびやかに解放され、気分はもう隠遁。何焯以下紀昀に至るまでの注釋家たちには概ね好評を博している。

1・2 山を眺めては、酒杯を前にしては、あなたは私を思うのです。曉を告げる太鼓の音を聴くと城内から出立し、私はあなたを訪ねます。「一箇^{ヒトリ}へ思ウノ深く、一箇へ去ルノ早キヲ寫ス」(金聖歎)

詩學禁癰によれば、2句が本篇の主意になる。禁癰は對を酌に作るが、それでは陶淵明風の靜の雰圍氣が崩れる。

3・4 去年^{こぞ}の雪はもはや壁垣に沿う水の流れに溶け込み、僧たちの齋の鐘は(寺院の)檻^{おび}にかかる雲を吹き散らすほどには響きません。禁癰が牆を橋に作るのは、馮浩の説のように非。それなら水流は大川で、ひなびた・つつましげな春の小川でなくなる。

5・6 雲のかげりは或いは濃くなり或いは淡くなりながら、竹や

柏のしげみの上を移動し(廖文炳のよみでは、竹柏自體の影が濃淡を變化させる)、彼方にあがる人の聲は漁師や樵夫の歌が入りまじったので、途切れたと思えば又聞えます。この一連でも禁癰本の異文はいずれも問題にならない。

7・8 私も(あなたと同じに)村の南のあたりにのどかな霞かもやに包まれる住居を買って、子孫代々お互い仲良く百姓仕事に精を出したいものです。何焯は村南を城南に作るのをよしとするが、これまた馮浩の説くごとく底本を採るべきだ。高麗本が煙を田に作るのは、一篇の要たる文字を消滅させるに等しい。何焯の引く曹操の語は、操が歸郷退隱の志をのべた「讓縣自明本志令」(魏志武帝紀注引魏武故事)に出る。

本篇は馮浩・張采田・安徽師大年表みな不編年。なお馮氏張氏が例によって義山の手筆否定説を唱えるのは輕率にすぎよう。

(井波陵二)